The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「適正テスト」の「言語能力カルテ」に関して
Author(s)	林田, 雅至
Citation	ISOコミュニティ通訳認証実績報告書. 2022, p. 60-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87473
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「適正テスト」の「言語能力カルテ」に関して

大阪大学名誉教授
ISO コミュニティ通訳認証言語能力審査官
林田雅至

はじめに

本「適正テスト」は 2018 年から関西 SDGs プラットホームの一環の事業で実施を始め，2020 年度まで大阪大学 CO デザインセンターの SDGs に関する大阪大学実績として取り組んだ，所謂言語の検定試験ではなく，言語の双方向運用能力をチェックする新機軸のチェック・テストである．行政・企業からも従来の外国語検定試験が必ずしも実地能力を保証するものではないと，再三指摘を受けており，そうした要望に応えるためにも開発したテストである．本来外国人に自言語を学習させるのは，同化政策で，植民地支配の一環である．昨今のグロバリゼーションの中で，対等な立場を尊重し，双方向の言語能力を有することが標準化されつつある．相互に相手の言語(外国語)を発話して，それぞれが母語として理解し，また，肯・否の意思なりを相手の言語で返答するというのが，多民族，多言語，多文化コミュニケーションの理念的基礎である．共通言語として第三言語を媒介してコミュニケーションを図るというのも可能であるが，共通言語が母語者言語(英語)になると厳密には公平性の担保は崩れてしまう．

「適正テスト」実施告知例：
https://kansai-sdgs-platform.jp/cat_event_past/413/(最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)
https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/co/2018/000521.php(最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)

一方，CO デザインセンター：コミュニケーションデザイン科目：リテラシーE(SDGs：地球市民の健康管理Ⅰ)[外国語学部学部共通科目方法論科目：文化史 C](火曜日第 4 限目，旧箕面学舎)，及び CO デザインセンター：同科目：リテラシーA(SDGs：多文化サポート概論Ⅰ)[[外国語学部学部共通科目方法論科目：言語学概論 B](火曜日第 5 限目，旧箕面学舎)については 2019-20 年度，授業最後の時間に，公益財団法人・旧大阪公衆衛生協会事務局長井戸武實氏の献身的な協力の下に，2018-2019 年度外部会場(「オカムラ」共創空間，

株式会社オカムラ関西支社「Kizuki LABO」内)と同様に紙媒体によるアナログ実施を行った：
http://workmill.jp/bee/access http://workmill.jp/bee(最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)

ところが，2020 年度になるとコロナ禍オンライン授業を強いられ,「適正テスト」もオンライン実施となったために，急遽問題用紙(PDF)及び解答用紙(W 文書)の受講者への電子配布によって行うことになった．現在，巻末：口頭高等発表「日本通訳翻訳学会, 2021.「高等教育機関による『ISO13611:2014 通訳－コミュニティ通訳のためのガイドライン』認証授与と言語運用能力に関する適正テスト実施について：林田雅至，小森三恵，佐藤晶子」に詳細な説明があるように，問題用紙提示(PPT による時限的自動送り)や解答用紙(Google Form による即時解答回収)と，印南敬介氏の尽力によって一気に高度な電子化プロセスの進化を遂げた．

「適正テスト」の「含み発話」の存在

このテストは受検 2 言語でヒアリングを行い，単語選択解答をしながら，頭の中で文章が文法化・構文化され，次の設問解答に臨む，すなわち，翻訳穴あき文が示され，構文化しながら，設問解答に臨むことになる．構文化する過程で,「含み発話」の存在が言語認知心理学で想定された．この「含み発話」概念は実際の通訳現場では口頭で発話して伝える行為であるが，テスト中でもあり，発声は不可で，頭の中の作業になる．実はこの「含み発話」の存在が,「適正テスト」を ISO コミュニティ通訳認証チェック・テストに格上げさせることを可能ならしめた．

従来の発話試験は実施において，受検生にとっても最大の難関科目で，緊張が昂じて実力が十分に発揮できないという弊害もあり，また，試験実施側からは，長時間に及ぶことや熟練の試験官であっても客観的な判断力を堅持することが困難を極めるということがあったのである．言語認知心理学の立場に立たない試験官(研究者)からは「適正テスト」は発話テストがないから駄目だという極端な批判や設問選択させるだけでは意味の distinction や文法理解が測れないという厳しい批判があるのは事実である．

ところで，Distinctive features は言語学音韻論で用いられる弁別的素性(特徴)と日本語で翻訳される．ここでは，語彙の形態論的(morphological)及び意味論的(semantic)相違を選択する(差別化する)場合にも, distinctive features を用い, また, 動詞の形を決める法(直説法,

接続法，命令法)・時制(現在・過去・未来)，人称・数を統語的に選択する場合にも，syntactic distinctive features を用いることで,「言語能力カルテ」作成上，有効活用することにした．それに基づく記述によって，受検者のどこに欠けるところがあるかが判明する．

「含み発話」の内在する「適正テスト」について，下記の基準で設定された各設問数(全設問数：140 問に対する割合)は以下の通りである：

1. Phonemic(Phonetic) distinctive features：20 問(14.3%)
2. Morphological(vocabulary) distinctive features：67 問(47.9%)
3. Semantic distinctive features：32 問(22.9%)
4. Syntactic distinctive features：21 問(15%)

バイリンガル話者の実例分析

ここでは，バイリンガル話者南谷かおり(2021 年度 ISO コミュニティ通訳認証授与者第一号者：日本語・ポルトガル語)の正解率を基礎に分析した結果は次のようになっている．ただ，個人情報保護の立場から，具体的な正解率などの数字は明示しないものとする．

まず，その前提となる本人の言語学習履歴(職歴などを含む)を下記 URL 資料や本人との遣り取りによって時系列でまとめてみた(年齢が複数にまたがるのは現地校年度学期開始が 1 月であることと彼女の誕生日との関係性によるからである)：

南谷かおり(1965～)：
1976 年(11～12 歳)：
ブラジル・ヴィトーリア市日本人補習校：小 6；現地校コレジオ・サグラード・コラサン・デ・マリア(Colégio Sagrado Coração de Maria*)初等教育課程：小 4 (10 歳相当：母語形成第１期[11～12 歳]前)
1977 年(12～13 歳)：
日本人補習校：中 1 ；ブラジル・コレジオ初等教育課程：小 5
1978 年(13～14 歳)：
日本人補習校：中 2；ブラジル・コレジオ初等教育課程：小 6
1979 年(14～15 歳)：
日本人補習校：中 3；ブラジル・コレジオ初等教育課程：小 7(4 年間ポルトガル語学習による習得)

1980 年(15～16 歳)：ブラジル・コレジオ中等教育課程：高 2
1981 年(15～16 歳)：ブラジル・コレジオ中等教育課程：高 3
1982 年(16～17 歳)：
国立エスピリト・サント連邦大学医学部 1 年生
1987 年(21～22 歳)：同上大学医学部卒業(6 年)
1988 年 ブラジル国医師免許取得
1988 年 3 月：大阪大学医学部附属病院・第 4 内科入局
1989 年 6 月：ブラジル国エスピリト・サント(Espírito Santo)州ヴィトーリア(Vitória)市に帰伯：エスピリト・サント州 Santa Casa 病院救急科研修医
1990 年 1 月：ブラジル国リオ・デ・ジャネイロ(Rio de Janeiro)州リオ・デ・ジャネイロ(Rio de Janeiro)市の州立病院(Hospital Servidores do Estado)[HSE]にて放射線科(研修医)就職
1991 年 12 月：HSE　退職
1992 年 9 月：大阪大学医学部附属病院・放射線科入局
1996 年：日本医師免許取得
1996 年 5 月：市立泉佐野病院，国立大阪病院（現国立大阪医療センター）
2004 年：りんくう総合医療センター市立泉佐野病院・放射線科
2006 年：りんくう総合医療センター 健康管理センター兼国際外来担当医
2012 年～：地方独立行政法人・りんくう総合医療センター 国際診療科・部長
2013 年：大阪大学医学部附属病院・国際医療センター 副センター長
2013 年：大阪大学大学院医学系研究科・国際・未来医療学講座・特任准教授
2019 年～：大阪大学大学院医学系研究科・公衆衛生学教室・招へい准教授

参考資料：
１．南谷かおり｜ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾍﾙｽ・ﾛｰﾙﾓﾃﾞﾙ・ｼﾘｰｽﾞ｜国際機関で働く｜グローバルヘルス人材戦略センター：https://hrc-gh.ncgm.go.jp/job-global/role_model/file08(最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)
＊図像：Sagrado Coração de Maria については下記 URL 論文 pp. 75-77 を参照：https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/79110/azulejoPortugal.pdf(最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)
2. 造形表現能力の発達の道すじと発達の節，美術教育を進める会(1979)
(山田康彦「戦後美術教育論の検討―イメージと感情の発達研究へ―」『東京大学教育学部紀要』第 20 巻，1980)，p. 245-57.)巻末に資料として附す．言語形成に係るコメントは林田

加筆として朱色で示す.
3.「日本ブラジル交流年」記念トークイベント「異文化大国ブラジルに挑戦する 21 世紀日本の「内なる国際化」」主催:大阪・サンパウロ姉妹都市協会,(財)大阪国際交流センター,2008 年 12 月 21 日(南谷かおり登壇)

「言語学習履歴」による分析

自身の言語学習履歴によると,11 歳で渡伯,現地日本人学校(半日制)で,中学校義務教育課程を修了するが,中等高等教育機関(高校・大学)の国語(日本語)教育を受けていないために,哲学・社会学・経済学などの専門的な知識がなく,日本語だけで見た場合,所謂抽象的概念の習得は欠けてはいるものの,ポルトガル語による高 2 から大学(医学部)学修により,日本語母語(形成第一期:11〜12 歳)並み,あるいはほぼ母語並みの言語運用能力を獲得している「ポルトガル語」によって,抽象的概念は習得していると思われる.

ポルトガル語はブラジル初等教育課程(小 4 から小 7[中一相当])を半日制で受けながら,15 歳でブラジル現地校高 2 レベルに飛び級進学している.そのことが逆に中学校課程のポルトガル語学習の不足を来し,例えば,「適正テスト」で接続詞:embora(英語:though;接続法の従属複文構成)が知識化されていなかったり(syntactic distinctive features),語彙の点で,正:depreciação:下落(受検者全体正答率:60%);誤:depredação:強奪(受検者全体回答率:20%)などの語彙習得に難があったと思われる(morphological distinctive features).

さて,医学部は休講がなく,ポルトガル語のみによる修学は困難を極めたが,具体的な事柄(解剖学など)を身を以って習熟したことが幸いし,学習言語(母語感覚に近い)ポルトガル語で抽象的・普遍的概念を修得したと思われる(6 年制:1982 年〜87 年:17 歳〜22 歳;1988 年国家資格 23 歳で取得).

1992 年日本帰国後,医師国家資格取得のために,具体的な概念を媒介にして,医療域を中心に日本語がブラッシュアップされ,抽象的・普遍的概念を介して,日本語の抽象的・普遍的概念も合わせてほぼカバーされ,1996 年に国家資格を取得.結果的に,ポルトガル語で習得した医学知識の概念を日本語に翻訳する,あるいは移し替える作業を通して,医療通訳者としての資質は身に付いており,このことが,現在彼女を,医療通訳に係る地域規模から国家規模に及ぶ様々なプロジェクトのオピニオン・リーダー格に押し上げていることは間違いない.ただ,総合的な抽象的概念の運用には若干難があると判断される.

例えば「適正テスト」問題で，「特定(×：認識)された感染源(×：発生源)」とか「人為的な(×：人工的な)二酸化炭素が増加(×：上昇)し続ける」など，文脈把握(Contextual Sensitivity)に迷いが生じ，語彙の意味(特徴)の差別化(morphological and semantic distinctive features) 判断に悩み，不正解となっている．ただ，「人為的」については，同問題で，ほぼ全受検者同様に，回答選択肢「人為的活動」と正解している．

さて，「人為的な二酸化炭素が増加し続ける」というフレーズにおいて，日本語：増加するとポルトガル語：aumentar(増える，上がる)を対照させて，意味・文法の特徴に相違が見られる．日本語の場合，「(モノの数量が)増加する」及び「(モノなどの程度が)上昇する」と分けているが，ポルトガル語では動詞 aumentar 一語で両者の意味を担うことになり，文脈把握に迷いを生じせしめたと言える．南谷かおりの場合，両言語について，学習言語習得・母語獲得のどこかの段階で，こうした意味範囲の差別化を意識化させる教育的配慮があれば，迷いや悩みを抱えることはなかったと推察される(semantic and syntactic distinctive features).

上記の点がカバーされていれば，総合素点で悠々S 評価：CEFR：C2(95 点～)に達したと思われ，下記に仮定的に修正理想型「言語能力カルテ」を作成している．

とは言え，時系列に即して構築を試みた「言語学習履歴」において，実際に限られた生活・学習時間の中で，ポルトガル語「学習」の外国語としての習得，同時に「母語(並み)」としての獲得のための時間は最大限有効活用されたと判断するものである．バイリンガルの理想的な体現者と言える．

「言語能力カルテ」プロトタイプ：

ISO コミュニティ通訳認証言語チェック・テスト「適正テスト」：評価基準：

総点 100 点(%)として，90 点以上を S 評価，80 点以上を A 評価，70 点以上 B 評価，60 点以上を C 評価とし，59 点以下は D「不適格者」とする．また，以下，個別の百分率についても，分野別領域・能力の評価の目安となる．

また, Contextual Sensitivity のバランスを示す得点差を 0 点から 0.25 点未満を S 評価, 0.25 点から 0.5 点未満を A 評価，0.5 点から 0.75 点未満を B 評価，0.75 点から 1.0 点未満までを C 評価．1.0 点以上の差のあるものは D「不適格者」とする．

Contextual Sensitivity を「見える化」する適正テスト

言語能力カルテ(理想型)

受検番号：000000　氏名：XXXXXX

総得点：95.1 点(S 評価：CEFR：C2 以上)

問題 1：**気候変動・生態系保全：**ポ語ヒアリング：1.0 点(100.0%)，日本語訳：1.0 点(100.0%)

問題 2：**自然災害・紛争：**日本語ヒアリング：1.0 点(100.0%)，ポ語訳：0.89 点(89.0%)

問題 3：**感染症：**ポ語ヒアリング：0.8 点(80.0%)，日本語訳：1.0 点(100.0%)

問題 4：**観光：**日本語ヒアリング：1.0 点(100.0%)，ポ語訳：0.92 点(92.0%)

ヒアリング：

ポルトガル語のヒアリング：1.8 点(90.0%)

日本語ヒアリング：2.0 点(100.0%)

翻訳：

ポルトガル語翻訳：1.81 点(91.0%)

日本語訳：2.0 点(100.0%)

ポルトガル語から日本語へ：3.8 点(95.0%)

日本語からポルトガル語へ：3.81 点(95.0%)

両者の得点差：0.01 点(S 評価)：両言語の双方向性のバランスはほぼ完璧に近いと言える．

全体評価：SS

この末尾に上記「学習言語履歴」及び分析を「所見」として添付することで，「適正テスト」「言語能力カルテ」(プロトタイプ)暫定版は完成する．最後に，作成者：林田雅至(ISO コミュニティ通訳認証言語能力審査官)を記入する．

附言

今後，「適正テスト」受検者についてこうした「言語能力カルテ」作成を進め，個人情報として厳正に管理・保護し，本人から照会があれば，全面開示し，自身の ISO コミュニティ通訳としての資質を向上させることに寄与できる体制を確立していきたいと思っている．

また，バイリンガルについて附言したいのは，小学校教育の小 5～小 6 に教科学習としての英語教育が本格的に導入されるが，「国語」小 4 前半，壁新聞作成のグループワークによ

って５Ｗ１Ｈが導入され，理詰め発話が促され，発話の理由付けが可能になって，言語形成期の人格形成，自我意識化が促される．ただ，小４後半になって 1956 年以来変わらぬ「ごんぎつね」精読によって，自己否定感を肯定・担保するような誘導がなされている．それはともかく，子どもの自立性，自立心が涵養される小 5～6 において，2 言語習得を求めることは，ここで述べた南谷かおりのように余程言語適応能力の高い人材でなければ，母語形成に混乱をきたす可能性を案ずるのである．

林田は母語形成はモノリンガル教育である方が望ましいと思っている．ここで取り上げている英語教育も，現状の中学校からの導入で，本格的に大学生年齢の 18 歳から取り組んでも，十二分に身に付くことは立証済みである．どっちつかずのことを double limited と言って，どちらの言語も母語形成されず，獲得していないことになると，大学生年齢以降で涵養される抽象思考が習得されない可能性が出てくるのである．それは懸念する事態である．闇雲に低年齢層の英語学習を否定するものではない．保育・幼稚園児から小学校低学年までに，例えば，体育や音楽教育の一環で，英語を活用することで，英語の持つリズム感に触れることや L/R の差別化を自然に身に付けることなどメリットは大きい．だからと言って，そのためだけに高学年に教科学習として導入することには賛成し兼ねるのである．

参考文献：

- 林田雅至 a, 2019 「グローバルの観点から長期滞在外国人の生命を問う」『大阪公衆衛生』公益財団法人大阪公衆衛生協会(90)， pp.17-19. https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/78687/ooe_090_017.pdf (最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)
- 林田雅至 b,2019.「外国語学習における媒介語の重要性」『国際語としてのロシア語 ： 国際統一基準による言語 能力レベル評価システム構築の現状と将来的課題』2018 年度大阪大学国際合同会議助成事業， pp.61-71. https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/85111/krussia_061.pdf (最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)
- https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/search/simple/?lang=0&mode=0&kywd=%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E8%AA%9E%E3%81%A8%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%AE%E3%83%AD%E3%82%B7%E3%82%A2%E8%AA%9E (最終閲覧日：2022 年 1 月 23 日)
- 林田雅至 c, 2020.「21 世紀グローバリゼーション時代に改めて「健康」を問う」『公衆衛生』医学書院(84)，pp.492-493.

参考資料：

1. 口頭高等発表「日本通訳翻訳学会, 2021.「高等教育機関による『ISO13611:2014 通訳－コミュニティ通訳のためのガイドライン』認証授与と言語運用能力に関する適正テスト実施について：林田雅至，小森三恵，佐藤晶子」
2. 造形表現能力の発達の道すじと発達の節，美術教育を進める会(1979)（山田康彦「戦後美術教育論の検討―イメージと感情の発達研究へ―」『東京大学教育学部紀要』第 20 巻, 1980)，p．245-57.）
3. 「日本ブラジル交流年」記念トークイベント「異文化大国ブラジルに挑戦する 21 世紀日本の「内なる国際化」」主催：大阪・サンパウロ姉妹都市協会，（財)大阪国際交流センター， 2008 年 12 月 21 日

（投稿日：2022 年 1 月 23 日）
（受理日：2022 年 1 月 31 日）

日本通訳翻訳学会　2021年9月5日（日）

高等教育機関による
『ISO13611:2014 通訳ーコミュニティ通訳のためのガイドライン』
認証授与と
言語運用能力に関する適正テスト実施について

発表者：林田雅至　大阪大学
小森三恵　大阪観光大学
佐藤晶子　大阪観光大学

目　的

『ISO13611:2014:
　通訳ーコミュニティ通訳のためのガイドライン』
１．高等教育機関による多言語の認証授与
２．言語運用能力を測る「適正テスト」
　　・受検について
　　・認知心理学の視座より

内容

1. 『ISO13611:2014』認証授与
2. 「適正テスト」の受検
3. 認知心理学の視座より考察
4. まとめ
5. Q&A

1．『ISO13611:2014』認証授与

【通訳サービスに関するISO 国際規格】　（注：WG３で扱う通訳機器以外）

- 2014 年　*ISO13611 : 2014 Interpreting – Guidelines for community interpreting*（通訳 ― コミュニ ティ通訳のためのガイドライン）
- 2018 年　*ISO18841: 2018 Interpreting services -- General requirements and recommendations*（通訳サービス ― 一般要求事項と推奨）
- 2019 年　*ISO20228:2019 Interpreting services – Legal interpreting – Requirements*（法務通訳サービス ― 要求事項）
- 2020年　*ISO 21998:2020 Interpreting services – Healthcare interpreting – Requirements and recommendations*（医療通訳 ― 要求事項と推奨）

１．『ISO13611:2014』認証授与

大阪観光大学　2021年3月18日　認証機関

『ISO13611:2014 通訳ーコミュニティ通訳のためのガイドライン』

2021年5月13日オンライン認証授与式

- 認証取得者　9名　（中国語−１、ポルトガル語−３、英語−５）
- （１）適正テスト　80%以上（CEFR　B2相当）
- （２）『ISO13611:2014』遵守調書
- （３）コミュニティ通訳資格に基づく実績ー証明書提出

審査

認証書授与

・プライベート認証
・大阪観光大学以外では、Institute of Science and Technology Austria（ ISTオーストリア：大学院教育を行う国立研究所）が『ISO13611:2014』認証授与を行っている。

2.　「適正テスト」の受検

「適正テスト」PPT提示：問題1から問題4まで(問題選択肢数現行140問：CEFR：B2相当80%以上：112問以上正解必要；所要時間90分，解答時限デジタル時刻掲示)：
サンプル：問題セクションⅠ：

ヒアリング資料(受検者には音声のみ提示，テキストは不可視)：3回音読(速度：通常，ゆっくり(単語，フレーズで区切る)，通常)：

An Intergovernmental Panel on Climate Change(IPCC) special report on the impacts of global warming of 1.5°C (one point five degrees Celsius)above pre-industrial levels and related global greenhouse gas emission pathways.

各自のノート・テイキングに基づいて，選択肢のa～dから正しいものを選び，解答用紙にアルファベットを記入しなさい．Google form形式で時限内解答提出させ，以降書き換え不可．ヒアリング中は未提示：

《選択肢》

1:　a Intergovernmental　b Intergovernment
　　c Under governmental　d Intergovernamental
2:　a Clymate Change　b Climate Charge
　　c Climate Changes　d Climate Change
3:　a Impact　b Impacts　c Empacts　d Inpacts
4:　a global warming　b globe working
　　c global warmming　d global heating

(以下省略)
実際は10設問程度

2.　「適正テスト」の受検

問題セクションⅡ：
受検者は各自ノートテイキングを参照しながら，下記をGoogle form形式で時限内解答：
下記の1～9までの括弧内に入れる適切な日本語を選択肢のa～dから選択し，解答用紙に記入しなさい．
穴あき文と選択肢は同一画面提示．選択肢が多い場合，常に穴あき文と区切り選択肢を時限に従って自動順次提示
(例：PPT穴あき文＋第１画面：選択肢1～9，同＋第2画面：選択肢10～18，同＋第3画面：選択肢19～27)
(　1　)に関する政府間パネル（IPCC）の(　2　)は，(　3　)のレベルを(　4　)(　5　)の(　6　)の(　7　)と関連する世界の(　8　)(　9　) に関するものである．

《選択肢》

1：	a　気候変動	b　天候変化	c　天候不順	d　天体変革
2：	a　特段報告書	b　特別報道書	c　特種報告書	d　特別報告書
3：	a　産業革新前	b　工業革命前)	c　産業革命前	d　産業革命後
4：	a　超える	b　越える	c　下回る	d　上下する
5：	a　摂氏15度	b　接写1.5度	c　摂氏1.5度	d　華氏1.5度
6：	a　地球熱帯化	b　地表温暖化	c　地球温暖化	d　地球冷却化
7：	a　影像	b　打撃	c　投影	d　影響
8：	a　緑色部屋ガス	b　温室効果ガス	c　密室運動ガス	d　大気保温ガス
9：	a　排出経路	b　輩出経路	c　肺出経路	d　排出道路

実際はヒアリングボリュームはもっと多く，従って，日本語穴あき文も多く，選択肢も倍量見込み．
(担当：林田雅至　ISOコミュニティ通訳認証言語能力審査官)

3.　認知心理学の視座より

認知心理学では、人間の心的活動を情報処理プロセスとして捉える

情報の入力、貯蔵、操作、検索、照合、出力・・・

心的辞書（mental lexicon）

長期記憶内に保持される言語知識の集合体
単語の形態、音韻、意味、などの属性情報や統語、語用などの文法規則を含む

意味ネットワーク（semantic network; Collins & Loftus　1975）

言語を含む知識表象は概念同士が意味的関連性によりリンクし、ネットワーク構造を形成している

ある情報が処理される　⇒　概念が活性化する　⇒　活性化がネットワークに拡散
⇒他の概念が活性化しスタンバイ状態に　cf）プライミング効果

各概念の「名前」は音韻的な関連性によるネットワークを持つ

(Collins & Loftus, 1975, p.407)

3.　認知心理学の視座より

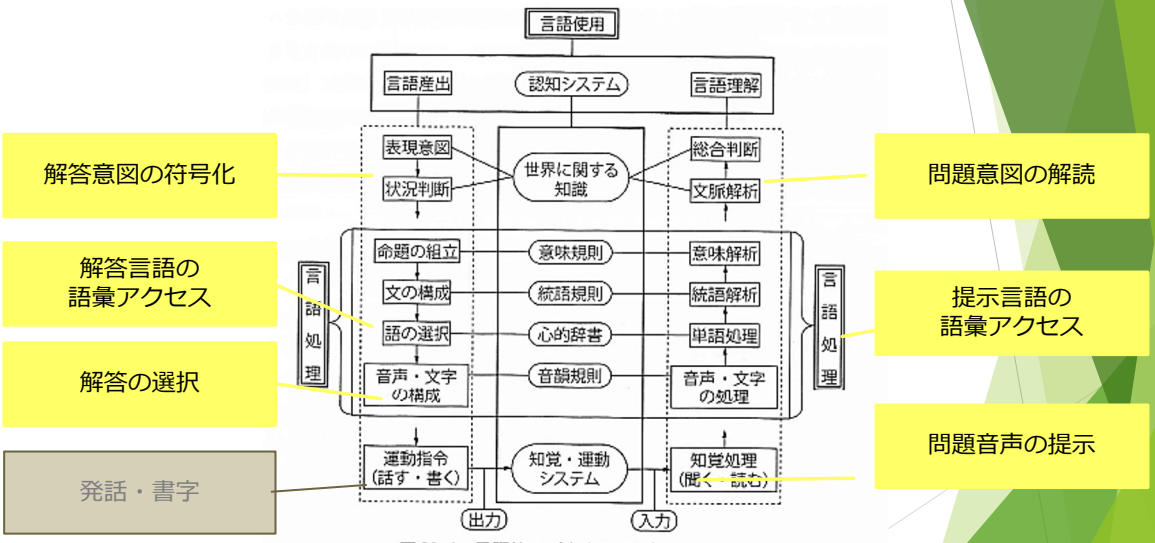

図 11-4　言語使用（産出と理解）のモデル

（坂本, 2014, p.192）

5．まとめ

1．高等教育機関による多言語の認証授与

・2021年5月13日『ISO13611:2014通訳ーコミュニティ通訳のためのガイドライン』認証授与を行った。

・日本で初めて9名（中国語1名、ポルトガル語3名、英語5名）の通訳者が『 ISO13611:2014 』の認証を取得した。

・オーストリア工科大学が『ISO13611:2014』認証授与を行っている。

2．言語運用能力を測る「適正テスト」

・受検について―「適正テスト」は2言語の双方向運用能力をチェックするためのテストである。『ISO13611:2014』認証制度を通して、言語学習において双方向運用能力が身に付く良い機会となる。

・認知心理学の視座より

本テストは、言語理解・言語産出プロセスを反映し、発話の前段階までの言語処理能力を測定するものである。

参考資料

- ISO. (2014). *ISO 13611:2014 Interpreting - Guidelines for community interpreting.* Geneva: ISO.
- ISO. (2018). *ISO18841: 2018 Interpreting services -- General requirements and recommendations.* Geneva: ISO.
- ISO. (2019). *ISO20228:2019 Interpreting services - Legal interpreting - Requirements.* Geneva: ISO.
- ISO 21998:2020 *Interpreting services - Healthcare interpreting - Requirements and recommendations*
- Jonas, P.(2015) Certification Scheme S05: Community Interpreting Service Provider pursuant ISO 13611. V1.1. *Austrian Standards,* (https://www.Austrian-standards.at/dokumente/produkte-loesungen/Zertifizierung/ISO13611_certification_scheme_EN.pdf)
- Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A spreading-activation theory of semantic processing.*Psychological Review, 82*(6), 407.
- 坂本勉（2014）「言語認知*Psychological Review*」行場次朗・箱田裕司（編著）『新・知性と感性の心理ー認知心理学最前線ー』福村出版，p.192.

Q and A

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

ご清聴ありがとうございました。

林田雅至　大阪大学
小森三恵　大阪観光大学
佐藤晶子　大阪観光大学

	運動感覚の生理的成熟期	運動感覚による表現操作		→イメージによる表現操作→			
		外界に働きかけ変化させる喜び		外界に働きかけ作り出す喜び →		労働過程の成立 (発想)-(計画)-(作業)-(生産物の獲得)	
主導的伝達手段	笑　顔 喃　語	話しことば	（みたてる活動）	話しことばの一応の完成 話しことば駆使 内言の成立 書きことば	書きことばの一応の完成 内言の充実	話しことば／書きことば＝第一使用言語（母語）獲得 「学習言語」「経済言語」第一次共存期 感情表現の理由付けを確立 「形容詞」表現の理由を複文構成で明示： これは嫌いだ，その理由は然るべき理由に則らないから． それまでは，これは嫌いだ，嫌いだからという単純な発話． (林田加筆)	第一使用言語（母語）による高度な抽象思考 「学習言語」「経済言語」第二次共存期 (林田加筆)
	・造形活動の基礎能力形成期	なぐりがきの時代		知的リアリズム期		視覚的・感覚的リアリズム期	リアリズム期
	手の働きの発生 ・にぎる ・ひっぱる ・つつく ・やぶる	・運動感覚機能の量的蓄積期 歩行の獲得	意味づけ期 なぐりがき＋ことば ３歳	(Ⅰ) ３.５歳~	(Ⅱ) ・羅列的表現(並列) ４歳	〔思春期〕≒中学 １０～１２歳から １４～１６歳	〔青年期〕≒高校･大学以上 １７歳以上
	○運動感覚は ・中心部から末端部へ ・上部から下部へ 成熟				(Ⅲ) ・基底線による画面の統一(系列化) ５～６歳 ⇧みつめる力の成立（部分） ⇧感情面の充実	〔９歳〕 小４ 小３ 〔１１～１２歳〕 １３歳 内面世界の表現	美術史との出会い
		１歳すぎ　２歳 手の活動高まる				⇧手の機能の充実 ⇧部分と全体の関連把握 ⇧新しい価値観の形成 ⇧感覚的抽象力の成立 **〈視覚的表現操作獲得の節〉**	
	０歳　・腰の形成		・手の働きに先導されて偶然できたカタチに形を発見した意味づけ ・意味に先導されたなぐりがき ・手の働きに先導された意味づけ （イメージによる表現操作獲得の節）	視覚的イメージに先導された描画活動（手の働き）			
		〈表現意欲を〉			〈表現意識を〉	〈表現意志を〉	
		手	ことばイメージ ＜ 手	手 ＜ ことばイメージ			

[造形表現能力の発達の道すじと発達の節]　美術教育を進める会(1979)

「日本ブラジル交流年」記念トークイベント

Palestra Comemorativa "Ano do Intercâmbio Japão - Brasil"

異文化大国ブラジルに挑戦する 21世紀日本の「内なる国際化」

A "Internacionalização Interna" do Japão no Século 21 desafia o grande país intercultural

日 時：平成 20 年 12 月 21 日(日) 11:00～13:00

場 所：大阪国際交流センター3 階 銀杏(いちょう)

主 催：大阪・サンパウロ姉妹都市協会

(財)大阪国際交流センター

共 催：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会

コーディネーター

●林田　雅至（Masashi Hayashida）大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授

1979 年東京外国語大学卒。2007 年より現職。専攻はポルトガル語圏文学・文化、宗教民俗学等。言語を通じて多民族国家ブラジルの豊かな文化にも精通し、近年は我が国の日系ブラジル人の増加などにかかわる社会問題をめぐる「地域多文化共生」「内なる国際化」にも着目、医療通訳や災害時の外国人支援などにも関わる。2004 年には大阪国際交流センターで連続セミナー「多彩な異文化大国ブラジル」をコーディネート。

パネリスト

●岡田　茂男（Shigeo Okada）ダイキン工業株式会社グローバル戦略本部顧問

1967 年慶応義塾大学卒。元ブラジル三井物産社長。2004 年より現職、ダイキン工業のブラジル展開を統括。18 年以上に及ぶブラジル駐在の経験から、現地のビジネスだけではなく、文化、社会風土に関しても深い造詣を持つ。また、大阪・サンパウロ姉妹都市協会副会長として、来年度実施される「姉妹都市提携 40 周年」の企画を進めている。

●南谷　かおり（Kaori Minamitani）りんくう総合医療センター健康管理センター長 国際外来担当医

幼少期から約 16 年間ブラジルで過ごし、1987 年ブラジルのエスピリト・サント連邦大学を卒業（ブラジルの医師免許取得）。その後、ブラジル、日本両国での臨床経験を積み、1996 年日本での医師免許も取得。現在は異文化の背景を持つ外国人診療の臨床経験を通じて、医療通訳の役割と重要性を研究、医療通訳者の育成にも力を注いでいる。

●髙橋　研一（Paulo Kenichi Takahashi）北里大学大学院客員教授

両親が 1930 年にブラジルに移民。1946 年パラナ州アサイ生まれ。1954 年両親、姉、弟と移民船「アメリカ丸」で帰国。大阪市立大学、大阪府立看護大学で 30 年間にわたり「解剖学」を教授したあと退職、来年 4 月からは沖縄に移住する。今年の 4 月、在日ブラジル人の生活を支援する NPO 法人関西ブラジル人コミュニティーでの活動を通じて、神戸のメリケンパークでブラジル移民百周年記念イベントを開催した。

サブコーディネーター

●バルバラ・ピエトラガラ（Bárbara Pietragala）

1996 年、9 歳で来日。堺市立の小学校、中学校、高等学校を卒業し、現在は大阪市内の大学・国際文化学科に学び、「異文化間協働」を専攻する 3 回生。「将来は日本とブラジルをつなげられるような人材になりたい」という目標に向かって邁進中。

●畑本　幹彦（Mikihiko Hatamoto）

1975 年、5 歳の時にブラジルに渡り、16 年を過ごす。1992 年に帰国し、現在は、大阪国際交流センターにおいて、ポルトガル語の専門職員として、インフォメーションセンターで来阪・在住外国人への情報提供業務に従事。

□司会：

みなさまこんにちは。本日はご来場いただきまして、まことにありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきます、大阪国際交流センターの泉井でございます。よろしくお願いいたします。

日本ブラジル交流年および大阪・サンパウロ姉妹都市提携 40 周年記念プレイベントとして、「異文化大国ブラジルに挑戦する 21 世紀日本の『内なる国際化』」と題しまして、ブラジルと深いかかわりを持ち、関西のビジネス、医療、学問などの分野でご活躍の皆様をお迎えして、トークセッションを進めてまいります。

では、本日のコーディネーター、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授の林田雅至先生をご紹介させていただきます。

林田先生は 1979 年東京外国語大学をご卒業。2007 年より、現職の大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの教授として、主にポルトガル語圏の文学、文化、宗教民俗学の教鞭を取っておられます。言語を通して多民族国家ブラジルの豊かな文化にも精通し、近年は我が国の日系ブラジル人の増加などにかかわる社会問題をめぐる「地域多文化共生」「内なる国際化」にも着目。医療通訳や災害時の外国人支援にもかかわっておられます。

では、ここからは林田先生にコーディネーターとしてトークセッションを進めていただきます。林田先生、よろしくお願いいたします。

□林田：

よろしくお願いします。
ただいまご紹介にあずかりました、林田雅至です。
ご案内のとおり、昨年の秋、大阪外国語大学と大阪大学が統合いたしまして、わたしは東京でポルトガル語を勉強し、もともとは大阪外国語大学のポルトガル語科所属、ポルトガル語の教鞭を大阪でとっております。20 年にわたり大阪市にも随分お世話になり、助けていただいたり、また微力ながら両国の国際交流に尽力をさせていただいたという経緯がありまして、今回、100 年に一度の会で、大阪でこうした大きなイベントの締めくくりを行うということで、改めて緊張しておりますけれども、みなさまに素敵なトークセッションをお届けし、その中で出演者にはたくさんお話をしていただけるように精一杯努めてまいりますので、皆様におかれましては最後まで暖かく見守っていただきたいと思います。
よろしくお願いいたします。

さて、ご案内のように、9 月以来におきまして、現下の大変厳しい経済状況の中でメディア等の報道にもありますように、我々日本人の雇用の問題に関して、それにもまして大企業を中心に、日系ブラジル人も含めて非正規雇用の方々が大変な状況に置かれているところは皆様もご存じのところではないでしょうか。

実際、日本が大変好きになって、日本で永住権をとり、日本で家を持たれたり、就学齢期のお子さんを抱えておられる人たちが、職を失ったりしているケースがあります。

実は、このタイトル「内なる国際化」は私がつけたのですが、例えば「共生」というのは文科省のいわゆる指導要領にも入ったわけですけれども、移民多文化共生、「内なる国際化」と言っても、現状を考えますとなかなかそんな生易しいものではないということを日々感じているところです。

さて、大変悩ましい状況はひとまずおきまして、ただいまから、座っていただいておりますスピーカーの方々ひとり一人に自己紹介かたがた、どの方もブラジルと長年にわたって非常に付き合いの深い方ばかりですので、お話を頂戴したいと思います。

トップバッターは岡田茂男さんで、もともとブラジル現地法人三井物産の社長をしておられ、ブラジルと非常に長い間、20 年近くにわたってお仕事をしてこられました。大阪・サンパウロ姉妹都市協会の副会長もつとめていただいております。1969 年に大阪市とサンパウロ市が姉妹都市提携を結びまして来年で 40 周年を迎えるわけで、その企画を現在中心になって進めていただいている人物です。現在は、ダイキン工業㈱のグローバル戦略本部顧問をしておられます。では、岡田さんからお話を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。（拍手）

□岡田：

皆さんおはようございます。

今ご紹介いただきました岡田でございます。私は、商社の三井物産に勤務しておりましたとき、ブラジルに 18 年駐在していました。
もっぱら営業をしていましたので、このテーマにふさわしいかどうか判りませんが、多分 18 年という駐在生活の長さで今日は選ばれたと思っております。
従って、営業活動を通じてその折々のブラジルの、政治経済はどんなふうだったかということを中心にお話したいと思います。

私が最初にブラジルに行きましたのは 1973 年 5 月から 6 月の 2 か月で、サンパウロに出張しました。出張目的は、当時栄華を極めておりましたブラジルの国営製鉄所の第 2 期拡張計画の国際入札に応札する為です。現在はブラジルの通貨はレアルですが、当時はクルゼイロで、1 米ドルが 6 クルゼイロ、円が 300 円でしたので、1 クルゼイロは 50 円の時代でした。

1971 年にブラジルの GDP が 11%以上成長しまして、「ブラジルの奇跡」と呼ばれ日本・イタリアの次はブラジルかと言われた時代でした。

サンパウロの街は高層ビルが建ち並んで、非常に華やかな繁栄期でした。

治安も良く、夜、街を歩いても安全でした。

当時フォルクスワーゲンのカブトムシはブラジルで国産化されており、16,000 クルゼイロ、日本円に直して 80 万円。当時西独から日本に輸入されていたカブトムシがやはり 80 万円位だったので、日本と値段が同じ位だなという記憶があります。

このあと、74 年の 12 月から 75 年の 12 月まで 1 年間、ブラジル機械研修員として、第 3 番目の都市、ベロリゾンテ市に派遣されました。そこで、ミナス州立大学工学部の 5 年生に聴講生として入学し、ポルトガル語を学びました。当時はポルトガル語が全然わからないわけですから、1番前の真ん中の席に座ってテープレコーダーを置いて授業を録音し、家に帰ってからまた聞くという生活を半年ぐらいやりましたね。74 年はちょうど第1次オイルショックで、日本は大混乱の時代でした。皆さん覚えておられるかわかりませんが、土日ドライブ禁止令が出まして、一人で乗るのは駄目だと、車には二人以上乗るべしという時代でした。ところが、ブラジルではサウジアラビア級の大きな油田が発見されたという記事が連日新聞に載りまして、土曜も日曜もみんな遠出ドライブしていて石油ショックなどどこ吹く風という感じでした。

やはりブラジルは資源大国だと感心していたら、1年遅れで石油ショックがやってきまして、ガソリンにアルコールをもっと混ぜろとか大童でした。次に全アルコール車だということで、全アルコール車の開発が 75 年ぐらいから始まったわけです。

78 年から 88 年までベロリゾンテ支店に勤務し、家内とそれから 7 歳の長女、4 歳の長男を伴い赴任しました。当時日本人学校はなく、娘は午前中日本人補習校、午後はブラジル人学校。長男はブラジルの幼稚園に通って、はじめは全然言葉が出来なかった二人でしたが、ブラジル人の子供達とすぐ仲よくなりました。

特に長男は入園の初日にかわいい女の子にキスされたとにこにこして帰って来ました。今でも二人共ブラジルが大好きです。

子供のためにと思い、日本人学校設立運動を展開しまして、1980 年にベロリゾンテ日本人学校が生徒数 48 人で開校し、私は初代学校運営委員長に就任しました。

当時ブラジルは軍事政権下で、鉄鋼、石油化学それから原子力発電分野への投資が計画的に国家規模でなされていました。私の専門は鉄鋼プラントの営業でしたが、世界でも 3 つの製鉄所が同時に拡張計画をやることは珍しく、当時は世界の鉄鋼プラント市場におけるブラジルは非常に注目を浴びていました。

相変わらず石油不足は解消されず、外貨節約のため国産化しようという気運が盛り上がり、欧米、日本から技術を導入し、ブラジルで機械を作るという国産化奨励策が打ち出されました。

軍事政権下では、ストライキもなく、ブラジルの製品は納期がきちんと守られるということで、輸出品に対する信用も確立された時代でもありました。

85 年に軍事政権が終了し民政移管されましたが、87 年には輸入超過、外貨準備高減少により、モラトリアムを起し、対外債務支払い不能に陥り、世界的に信用を失墜しました。しかし、私はブラジルのモラトリアムは長く続かない、半年後にはちゃんと支払える状態になるから、商売を続けようと強く本社に言い、ベロリゾンテ支店はそのまま商売を続けてました。

88 年に日本に戻りましたが、その年のインフレ率が 700-800%でした。日本人にとっては、700-800%というのは信じられない数字だと思います。スーパーマーケットでの値段が 2 日か 3 日ごとに変わり、レストランの価格も 1 週間ほどで変わるという時代で、輸入制限も厳しくなり、しばらくブラジル経済は低調でした。

90 年～93 年は東北部州知事をしていたコロール大統領が選ばれ、経済開放政策を打ち出し、規制緩和がなされて輸入も自由化された時代でした。92 年にはリオで環境会議が行われました。

93 年～97 年までリオ支店長とし、再度ブラジルに駐在しましたが、93 年は最悪でした。

政府発表でもインフレは年 2,500%に達しました。これは当然のことながら、800%の時よりももっとひどいです。毎日値段が変わるんです。「こんなひどいインフレはどうして起こるの？」と当時友人だった元企画大臣曰く「インフレというのは国民が政府を信用しないから起こる、国民が政府を信用すればインフレはおさまるよ」

94 年の 7 月 1 日からカルドーゾ元大統領が大蔵大臣の時に、インフレ撲滅施策として、レアル計画を発表し、1米ドル＝1レアルということになりました。彼のインフレ対策は非常に良く考えられた対策だったと思います。それまで何回も行われたインフレ撲滅対策が全て半年ぐらいで失敗しているので、どうせ今回も半年後には元の木阿弥と予想していましたら、彼は過去の対策がどうして失敗したかを全部検証して、国民に政府を信用させ、インフレがない素晴らしさを体験させることによりインフレを収束させるという方策を講じたのです。

簡単に説明しますと、74 年 2 月からウルビという幻の通貨を作り、半年間ドル化の予行演習をやったんです。ウルビとは真の価値という意味で、1ドル＝1ｳﾙﾋﾞ＝2,500 クルゼイロとしますと、毎日クルゼイロは米ドルに対し切り下がるので、今日は、1ウルビは 2,500 クルゼイロ、明日は 2,550 クルゼイロと政府が毎日切り下がったクルゼイロを発表するのです。レストランに行くとウルビとクルゼイロで値段が表示されており、クルゼイロは変わりますが、ウルビは何日経っても変わらないのです。

それを半年間国民に価値が変わらない通貨を持つことはこんなに素晴らしいことだと教え込んだんです。これはカル

ドーゾ氏の大功績だと思います。

レアル計画が功を奏し、94 年にはインフレが沈静化して 94 年末のインフレが 700%ぐらいまで下がりました。95 年からは徐々に下がって今は大体 4%から 5%です。インフレが収まってみんなが安心して物が買えるようになりました。

要するに高インフレ下では、貧乏な人は、給料をもらったら、すぐその給料で物を買わないと価値がどんどん下がっていく。月の最初に給料をもらったら貧乏な人は冷蔵庫もありませんから1か月分の食料は買えないので、半月分の食料を買う。で、今度は 16 日に残りの半月分の食料を買うのです。例えば 100 貰っても貰った日は 100 でも1ヶ月後には、50 になってしまう。従って、100 の給料も実際は平均値 75 なのです。ところが、インフレがなくなると 100 の給与は1か月後も 100 なんです。だからセメント1袋買う貧乏な人が、10 万人がいれば、10 万袋売れるんですね。だからインフレがなくなり経済は停滞すると予想されていましたが、大衆の消費が増えて、景気は良くなったのです。それを当時は《蟻の消費》と呼んでいました。カルドーゾ大統領は結局再選され、95 年から 2002 年まで務めました。

97 年からサンパウロの社長になり、2000 年に日本に帰って来ました。

ブラジルの大統領は 3 選禁止なので、2002 年からルーラ大統領が選出されました。ルーラ大統領は労働党出身で、当初財界および諸外国から不安視されましたが、カルドーゾ大統領の経済政策を踏襲し、堅実な経済運営を行い信用を高めました。

ルーラ大統領はその後再選され現在に至っていますが、彼は後世《名大統領》と言われると思います。

ブラジルはポルトガル王国の植民地として建国され、常に貧富の差が大きな国でした。ルーラ大統領は、東北部の貧乏な人に生活補助をどんどん配り、最低賃金を上げています。私の 30 数年の経験ではブラジルの最低賃金は過去米ドルで月 60-100 ドルでしたが、現在は 200 ドルを超えています。

日本では《ばらまき政策》と非難されそうな施策ですが、ブラジルのような貧富の差が大きな国では、この政策は的を得ていると思います。

ブラジルの GDP が 1 兆 3 千億ドル、外貨準備高が 2,000 億ドル以上、対外債務が 1,300 億ドルと、私が駐在していた頃には信じられない経済指標になっており、レアル計画開始後 14 年以上も経っていますが、1米ドル＝2.2-2.3 レアル、インフレも 4-5%、鉱物資源、食料が豊富なブラジルの将来は明るいと思います。

三井物産を辞めてからダイキン工業に勤務し、今でも年に 3、4 回ブラジルに出張していますのでこの 18 年の滞在記録が、どんどんまだ伸び続けてるというのが現状です。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

□林田：

岡田さん、ありがとうございました。

それでは、時間の関係もありますので、取り急ぎ次の高橋研一さんのご紹介をします。ブラジル生まれで 1954 年に両親と姉二人、弟一人とともに帰国されて、日本で理学部卒業後、大阪市立大学の解剖学教室助手となり、大阪府立看護大学を経て、現在は退職はされております。高橋さんには、ブラジルの移民のお話、そして帰って来られてからのお話をパワーポイントを元にしながら、話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

（※註：パワーポイントの資料は末尾資料として添付）

□高橋：

はい。紹介にありました高橋です。

私は 1946 年にブラジルで生まれています。両親は昭和 5 年ブラジルに移民して、いわゆる一般的に言われている農業移民としてコーヒー栽培などをしながら 6 人の子供を育てました。私もサンパウロから西へ 600km 離れたロンドリーナ近くのアサイと言う、日系人が創設したコロニア（日系人コミュニティ）で幼少期を過ごしましたが、父親自身は日本にすぐに帰りたいと、いわゆる「金のなる木」コーヒーでですね、お金を儲けて日本に帰るという夢を持って行ったんですが、皆さん御存じのようになかなか上手くいかなかったんですね。でも、日本社会に対する帰属意識が非常に強かったので、私自身は8歳までは日本語しかしゃべったことがなく、日本語でしか「勉強」したことがなかったですね。

で、そういった形で日本に帰ることになったのは、昭和 29 年(1954)福井の田舎に帰って来たんですが、その時に実際は言語として日本語をしゃべっていましたので、すんなりと日本の学校に入ることができました。そういう意味で非常にラッキーな、親がそういう考えを持っていましたのでラッキーな環境でしたね。その後はそのままずっと日本の小中高校・大学を出ることができました。

で、常日頃から私自身はどういう意識で暮らしていたのかと言いますと、私はもともと生物学を専攻してましたので、「サケは生まれたところにもう一度帰って来る」っていう説がありますが、私もやっぱりブラジルで生まれてますので、どうもその血は残っていたようで、いろんなところで地下鉄のつり革見ても「ブラジル」という言葉があるとすぐこう目がいったりですね、そういう状況でずっと暮らしていました。絶対にブラジル人と結婚したいと思ってましたので、ちょっと遅くなったんですが、日系人のブラジル人と結婚することができましたね。やっぱりそういうブラジルに対するあこがれをずっと持ってましたので、自分自身もやっぱり「移民の子として生きてる」という意識は今も生きています。ところで、今、ブラジル移民と言うのは今年 100 周年というふうに言われてますが、日本では日本ブラジル交流年となっていますので「移民の子」としてはちょっと不満の題名なんですね。やはり私として

移民というものが原則になっていますので、実はこのスライドについて日本ブラジル交流年を移民 100 周年記念イベントという風に、勝手に書いてしまっています。申しわけないです。はい。

来年は大阪・サンパウロ姉妹都市協会の 40 周年ですが、私自身ももう多分 20 年近い会員になっていると思いますが、そういった意味も込めて今回こうした機会に私が話をさせていただけるのは非常に光栄だと思っています。

では、次のスライドをお願いします。

皆さん御存じかと思いますが、1908 年 4 月 28 日笠戸丸が神戸から 781 名の移民を乗せて出港しました。6 月 18 日にブラジルのサントス港の第 14 埠頭に着岸しました。そのサントス港の近くにこういう記念碑があります。その記念碑の右下に、『大地に夢を』という碑銘があります。つまり、ここに移民した人たちは非常に大きな希望を抱いてブラジルに来たのですが、現実は厳しかったんです。

次お願いします。

サントスに着いた後、スライド右にありますこういう客車ですね。正確には「貨客車的な列車」で移民はサントスからサンパウロまで運ばれました。左の写真は旧移民収容所なんですが、そこに約 1 週間ほど滞在してブラジル全国に労働力として配属されました。歴史的な移民の建物です。現在は「移民博物館」になっています。

次お願いします。

いろんなところに移民の移住地があります。これは昨年の写真なんですが、レジストロというところがあるんですが、そこに移民博物館があることを全然知らなかったんですね。移民のことに関心がありながら、余りこのことを知らなかったのです。やはりブラジルに渡った人たちは今年移民 100 年目を迎えて、80 周年の記念のときにも、いろんな博物館を建てています。その中のひとつの建物がレジストロで、こうして節目に歴史的建造物を残しております。

下の方は、同じレジストロの一角で日伯文化協会です。ブラジルに行った日本人は日本を忘れないという形で文化を継承しています。恐らく日本に残っている文化のかなり古い部分がまだブラジルに残っていると思いますし、実際に資料館の中に入っていくと日本には今では恐らくもう見られないような資料がいっぱい残っています。戦前のレコードとかですね、多分日本では今売ったらお宝になるようなものがいっぱいありましてね、日本人としての歴史も残す形で、こうした博物館で今年 100 年目を記念してさまざまな活動をしております。

次お願いします。

これは昨年の同じ時期に行った時にお会いした上原幸啓先生なんですが、ブラジル側の 100 周年記念委員会の委員長を務めておられてまして、ブラジル移民 100 周年の記念で皇太子様が行かれたときのご案内役や接遇された人物です。実は上原先生は現在サンパウロ大学の終身教授になっておりますが、私と逆で、沖縄で生まれて9歳でブラジルに行かれました。サンパウロ大学を出て、そして大阪・サンパウロ姉妹都市協会とは直接関係ないのですが、大阪市立大学とサンパウロ大学間の研究者交流のコーディネーターをされておりまして、私自身も研究者交流の一環で、サンパウロ大学に短期留学させていただいたことがあります。そのときからの知り合いになります。上原先生は9歳でブラジルに行って日本生まれのブラジル人と言っていますが、逆に私は 8 歳で日本に帰って来ましたので、ブラジル生まれの日本人ということなんですけれども、実際はお互いに話してますとやっぱり日本人としての共通部分でいろんなことが話できるという意味で、あとのディスカッションの中でもいろいろ出てくると思うんですが、「言葉」というものがさまざまな意味で重要なキーワードと思っています。

次お願いします。

移民について見ますと戦前の移民は現在 6 世まで生まれております。戦後移民は 4 世まで。それから、駐在型の岡田さんとか駐在員の子供としてブラジルに滞在した南谷さんなどで、国籍を持っている場合、既に日系 3 世まで生まれていると思います。それから現在日本に来ている在住の日系ブラジル人、ブラジル時代からカウントしてもう 5 世まで生まれております。特に先ほど林田氏が言われました日本の中での日系ブラジル人の問題はこれからいろいろ起こって来るだろうという話もこのイベントの中で、後ほど話をさせていただきたいと思います。

最後のスライドをお願いします。

きょうのテーマの「内なる国際化」ということなんですが、私が考える問題点として一つだけ申し上げれば「移民における寛容性をどう涵養するか」ということです。「寛容性の涵養」の意味ですが、急激に物事を変えようとしても非常に難しい面がありますので、ゆっくりと養って変えていく。つまり、日本の中に入って来るブラジルの日系人はいろんなことをやります。例えばゴミの出し方も不味いところもありますし、やたらどこかに触ったりします。日本人の目から見たら異質に見えるけども、それはそれぞれの文化の特徴なので、「ブラジル人はそういうもんなんだ」というブラジル人のおおらかさを含めて、日本の方々もですね、ゆっくりとそういう目で見ていただけると有難いと思います。ブラジルの中で日本人が非常に温かい目で見守られブラジルの中に取り入れられブラジル社会で活躍できるようになったんですが、日本人の中に入ってきている日系ブラジル人に対して、今、ブラジルの日系人がブラジル人社会で活躍できているのと同じような場をどう提供できるかというのがこれからの問題として出てくるんじゃないかと私は思っています。一番下の問題点につ

いては先ほど林田先生が指摘したように、もう一つこれから大きな問題として出てくるだろうというふうに今考えています。

ということで、私の問題提起を終わらせていただきたいと思います。

□林田：

ありがとうございました。(拍手)

高橋さんは日本に帰ってこられてからやっぱり大変に苦労されて勉学を進める中、折々に大変すばらしい教師に出会われ、日本語の学習、学習言語としての日本語というものをきちんと身に付けられ、そして最高学府まで登りつめられたわけです。昭和 49 年(1974)ごろは日本で非常に医者が必要であるという好機もあって、医学部の解剖学教室の教員不足もあり、大阪市立大学医学部、そのあとは大阪府立大学看護大学で医学の基礎教育に長年携わってこられました。ブラジルから帰って来られた日本人として模範的なキャリアを積んでこられたことになるでしょう。

それでは、続きまして南谷さんの方からお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

□南谷：

皆様おはようございます。南谷かおりと言います。

私は生まれは堺市で 1976 年に父親の転勤で 11 歳、当時小学校 6 年生でしたけれどもそのときにブラジルに渡りました。場所はエスピリトサント州ヴィトリア市で日系人の非常に少ない街でした。そこで、当時ブラジル・イタリア・日本のさっきお話しされていた鉄鋼の関係で一大プロジェクトがありまして、そこに父がそのプロジェクトに参加するため会社の方から派遣という形で転勤となりました。

私は当時 11 歳、アルファベットもわからず、全く日本語しか話せない状態で渡伯しました。

当時は日本人が通う日本人補習校、駐在員の子供たちのために日本と同じ教育をしている学校ですけれども、そこが半日制だったので午前中そこに通いながら午後からは同時に現地校、ブラジル人の学校に半日通っていました。

それで徐々にポルトガル語を勉強して覚えていったわけですけれども、1980 年に日本人補習校・中学部を卒業になりました。日本では中 3 までが義務教育で外国に住む日本人に対する高校教育はありませんでした。日本では教育が小学校・中学校・高校で 6-3-3 制ですけれども、向こうの場合は 4-4-3 制で 1 年少なく、日本より 1 年早いのですね。そういうことで私が日本式の中学部を卒業したときには年齢の上で現地の高校 2 年生でした。そこで当時現地校に通っていたのですが、別の学校の高校 2 年生に編入学しました。この高校というのは日本人がほとんどおりませんで、全く外国人の中で暮らすことになりましたが、家では日本語をしゃべっていました。高校生ぐらいだと「私が日本人だ、外国人だ」という感じで周りが見ていて、接し方もちょっとよそよそしいところがあり、私は「外国人」と認識されたままそこで勉強しました。そうすると補習校がなくなり一日中ポルトガル語の授業を聴いているわけですから日本語の活字に飢えてしまい、長い夏休みに入ると日本の祖母から日本語の小説をいっぱい送ってもらって、その小説を読みあさった時期がありました。

それで、次の年は高 3 になり、その次の年 1982 年 1 月には大学受験をして、エスピリトサント連邦国立大学・医学部に入学しました。そこでこの医学部なのですが、当時入学した頃クラスの半数が女性でした。日本で多分その頃の医学部に女性は少なかったと思いますけれども、向こうではそういう意味で馴染みやすかったです。

大学に入ると高校のときとは違ってみんなもう「外国人」とかそういうような線引きがなくなり、普通にブラジル人としてずっと授業にも出ていました。友人も周りはブラジル人ばっかりでしたし、大学には日系人が少なく、また生粋の日本人はいませんでしたから大学で日本語をしゃべることは全くありませんでした。

そして医学部は 6 年制なので、1987 年 12 月に大学を卒業し、向こうの医師免許を取得しました。当時は医師免許を取得したのが日本より 1 年早く、日本で卒業するよりも 1 年得をしたようになっていました。それまでブラジルでずっと勉強しておりましたので、一度日本の病院を見てみたいと思い、留学することになり、1988 年 4 月から 1 年間大阪大学・第 4 内科「老人病医学講座」で研修しました。この間、1 年日本人の中で生活したわけです。それまで大学時代にブラジルで生活していたときの自分のアイデンティティは、結構もう慣れ親しみ周囲に溶け込んでいたので、自分としてはもう「ブラジル人」とほぼ同じだと思い、少しの差はただの個人差だろうと思っていました。しかし、日本に帰国し、一年間過ごした中で日本人と共存すると、いろいろな考え方とか価値観とかが私の人生最初の 11 年間に日本で形成された人格とフィットするものが多いということがわかり、ここで初めて私はやっぱり「日本人」だったのだと痛感しました。

で、大阪に 1 年間いたのですが、実際家族が皆ブラジルに住んでいましたし、私だけ日本にずっと住む気もありませんでしたから、1 年後ブラジルに帰りました。そこでブラジルに帰って初めてカルチャーショックを受けました。日本に来たときにカルチャーショックはありませんでした。というのは日本のことは大体雑誌とかテレビとかで知っていましたので、あんまりギャップはなかったのですけれども、向こうに帰ってからなぜ自分がポルトガル語をしゃべれるんだろうとか、なんでブラジル人の友達がいっぱいいるんだろうとか、そこにすごい違和感を覚えました。違和感を覚えつつ、ちょっとだけ、1 か月くらい引きこもった時期がありました。何か外に出るのが怖いみたいな感じで。でもその後また慣れて来まして、その次の年 1990 年には研修医になるテストをいくつかの病院で受け、リオデジャネイロの病院に受かったので、リオの

方に引っ越しました。そこで 1990 年の 1 月から 2 年間リオのある公立病院で研修医として働きました。しかし、先ほど岡田さんがおっしゃったように、この時期はすごいハイパーインフレの時期だったのですね。それで、公立病院というのはただでさえ、給料が少なく、また当たり前のように給料の支払いが 1、2 か月おくれるのですね。ハイパーインフレですから 1 か月おくれたらもう物価がどんどん下がっていくわけで、2 か月後に給料が出てもですね、価値としてはさらに低い給料になっている。そういうことが 2 年間続きました。当時日本人の友達で、駐在派遣で来られてブラジルで働いている人がいたのですけれども、その人たちは日本から給料が出ていてその給料ベースで働いておられるわけですね。同じ年齢なのにこの差は何だろうと思いまして、これはブラジルにいるのは余りよろしくないかもしれないと、ちょっとした危機感を持ちました。ほかにも私は国籍が日本だったので、向こうでは公務員にはなれなかったんですね。研修はできましたけど、公務員として正規採用されることはなかったので、そういう理由もありその研修が終わった 1992 年にまた日本に戻って来ました。

この 92 年にすでに私の家族は、ブラジルは治安が悪化して誘拐事件が多くなって来ていたので、父親だけ残して日本に帰って来ていました。それで私も 1992 年に改めて大阪大学で、今度は別の科である放射線科に入ってそこで研修を始めました。

同時に日本で医師免許を取得するための勉強を始め、その間厚労省で数々の試験を受けなければいけなかったわけです。基礎医学の解剖学・生化学・生理学などから臨床医学まで全部日本語で覚え直し、数々の試験にパスしまして 1 年間大学病院で研修し、最終的には 96 年に日本の医師国家試験を日本人と一緒に受けて日本の医師免許を取得しました。

そこからは大阪大学の人事で地域県内の病院を転々と働いて移ったわけですけれど、現在は関西国際空港の対岸にあるりんくう総合医療センター市立泉佐野病院で、もともと外国人の多い病院だったところ、私がポルトガル語・スペイン語・英語で対応可能だということが判りまして 2006 年に国際外来が設立され、その担当医に抜擢されました。

現在は外国人患者も増え、30 数名の医療通訳者の方々が当院で活動し、その協力体制のもと外国人医療にあたっています。時々来るブラジル人患者と話すと必ず「あなたブラジル人ですか、どこの出身ですか？」って訊かれるのですが、何か私的には「ブラジル人です」とは言いにくくて、いつも「ブラジルに 15 年住んでいた日本人です」とこたえています。以上です。(拍手)

□林田：

ただいま、御三方それぞれの言語歴あるいはその職業歴について、大変貴重なお話をいただきました。一般的な話ですけれども脳の発達について大体 3 歳～14 歳ぐらいまでは言語を受け入れるのに柔軟に対応できるということです。我々はそういう脳を持っているわけです。だからその過程で大体 11 歳ぐらいが最初の、これを母語と言っていいのか、第一使用言語を獲得することになるわけです。皆さんのお話を聞いておりまして、岡田さんは大学を卒業し機械技術の専門家になられたわけですが、ブラジルへ行かれてもう 30 年以上にわたる交流や駐在勤務などの中で、ポルトガル語を習得していかれるわけですね。ブラジルでは 1978 年は一つのポイントになる、つまり移民 70 周年に現在の天皇が皇太子時代に平和外交で訪伯され、それから首相もブラジルを訪れ、当時の日系社会の活躍を見てサンパウロ大学に日本語科を創設して国際交流基金から人材及び資金を支出させたという経緯があります。ただ同時に、いわゆる日本という国が、1980 年を挟んで Japan as number one ということで、かなり天狗になっていた時期ですね。ブラジルではその 80 年以降つまり特に民政化以降インフレが留まることを知らないということは、先ほどの岡田さんのお話にもありました。92 年から 93 年はハイパーインフレで 1,000%あるいは 2,500%という時期であり、その中で日本人の駐在員社会ではやはり治安の問題もあり、なかなか現実のブラジル社会と向き合うことができない時期でもあったわけです。岡田さんの場合は、いわゆるブラジル経済の「奇跡の時代」でありましたし、ブラジルで実際に外国語研修や講義を受けられて、教室内で最前列に陣取り教師の唾が飛ぶぐらいのところで熱心にポルトガル語を勉強されたわけです。技術専門家として当然日本語で技術の知識がありましたが、そういう意味ではポルトガル語の学習は非常に有効だったと言えますし、1978 年以前に外国語学習がかなり徹底できたと思います。やはり岡田さん自身、言語あるいは文化、あるいは食生活などを通じて、ブラジルを知るということが内的に醸成されていったわけです。確かに岡田さんは大人になってからポルトガル語に接しられたわけですけれども、立派なポルトガル語の使い手であると僕は考えております。

さて、高橋さんですけれども、ブラジルで生まれて日本に戻って来られたわけですが、その幼少期はブラジルで過ごされておられます。家では日本語を使って、家庭外の生活環境はこれは当然ブラジルですからポルトガル語の言語文化環境の中にあるわけです。そういうものが高橋さんの心の中で、影響がやはりかなり大きいと思うのですが、どうでしょうか。

□高橋：

そうですね。さっき話したように私の親父は戦前の教育を受けて、明治 43 年生まれですからね。そうするとその影響が非常に大きくて家の中は日本語だけ、逆に言うと外に行っても「現地の子供と遊ぶな」と言うぐらいのかなり厳しい環境だったですね。でもそういうふうにいくら遮断しても、子供は

家から出て行きますから、いろんな影響を受けて行きます。幼少期に受けた環境ですか、「ブラジルの環境」っていうのはやっぱり残ってましたね。

で、日本に帰って来て逆に今度は日本の小学校でクラスの子たちも私を見る目はやはり「ブラジル人」として見てるんですね。日本語しかしゃべれないんだけれど、「ブラジル人」として見てるということでした。ずっとそのことは残ってましたよ。田舎でしたから自分でポルトガル語を勉強するっていうチャンスがありませんので、金沢大学に入学したときから今度は「ポルトガル語」を改めて独学で勉強しました。また。たまたま日系人の嫁さんをもらうことができたんで、日常会話はまたブラジル語になっていって、そういった形でやはりずっとブラジルの言語が頭に入ってるという環境は続いてますね。

□林田：

高橋さんとは付き合いはもう 20 年以上になりますけれども、拝見していてすごく開放的な雰囲気をお持ちなんです。それはやっぱりブラジル仕込みかなというふうに思います。先ほど岡田さんのご子息が幼稚園で友達の女の子にキスされて、随分浮き浮きした気分になった、というお話もありました。そういうやっぱりラテン的で開放的な気分が、高橋さんの心の中に結構入ってるような気がしますね。

□高橋：

逆に言うとね、南谷さんの場合に向こういたときにちょっと 1 回引きこもるような状態になったというのは、ちょっと違うんですかね。その辺。

□南谷：

私の場合は、そうですね。向こうに行ってブラジル社会の中で生きていたので、完全にブラジル人化しているようで、でもスラングとかまではまだわからないレベルだったので、結局みんながいろいろジョークを言い合い笑っているときに、そこまでは入って行けないような部分はあったのです。ただ、色々なことへの対応の仕方とか考え方とかにはもう慣れて、向こうで周りの友達の考え方とかを聞いて育って来ましたから、そういうのは全く問題なかったのですけれども、やっぱり日本に来て日本人の中で生きてみると、例えば笑いのつぼにしたって、色々なことがちょっとずつ違うんですね。そういう意味でやはり日本にフィットしていることがわかり、そこで初めて自分としても、向こうにいたときはただあわせていただけで、自分が自然に同化していたわけではないのだなということが判りました。それがわかってしまった時点でその考えを持って再びブラジルに帰って来たときには、自分のなかに違和感が生まれたんだと思いますね。

□林田：

南谷先生の場合にはやっぱり 11 歳で向こうに行かれたということですから、その感情面、感性のかかわる部分ですね。やっぱりそれは日本語の文化が身についていると思います。ただ、ブラジルに行かれてからは、いわゆる学習言語、論議能力をやはりブラジルでポルトガル語で鍛えられ、そういう環境にどっぷり浸かったわけです。しかも先ほどのお話ありましたけれど、ブラジルでは大学に入る場合が1年得なんです。だから、南谷さんは 17 歳で大学に入学されているんですよね。

おもしろいことに実は入管法の改正された 1990 年以降に日系の方々が日本へ非常に容易に来られるようになった時期に、非常に一つのシンボリックな例として、ブラジルの高校を出た人を大学で受け入れるというサンプル的な方が何人かおられるんですね。一人の方は僕は非常に親しくて、昨年サンパウロのカトリック大学で名誉ある博士号を取られました。彼女の場合日本に来たとき、17 歳ですから本当は大学に入れないんですけれども、そこを旧外大・日本語、留学生センターで大学生にした、という経緯がありました。

さて、南谷さんは日本に帰って来られた時期はやっぱりブラジルがハイパーインフレで大変な時期であったということでしたが、その後日本からブラジルへ行かれてます。1994 年以降、ブラジルが経済的に落ちついた時期にですね。そのころはやっぱり印象が変わりましたか。

□南谷：

私はブラジルの永住権を持っていまして、これを 2 年ごとに更新しないと失ってしまうので、一応向こうでも医師として働けますから永住権を失ってしまうと再度取得するのは難しいだろうということで、毎回 2 年ごとにブラジルに帰っています。そのつど友達に会って話を聞くのですが、私がブラジルを去ったころは仕事をする上でひどい環境だったのが、2 年ごとに帰るとちょっとその給料がよくなっていて、またその 2 年後に帰るとさらにちょっとよくなっているという感じで、少しずつ医師の労働条件がよくなっているように思います。でも相変わらず治安はいつも悪く帰っても出かけたりするのは何か怖い感じがしますね。ブラジルに帰るときは 1 週間ぐらいしか休みが取れず、そのうち 3 日は飛行機と時差ぼけで消えてしまいますから、行ったと言っても数日ではあんまり状況が把握できないまま帰って来るので、具体的な細かい変化はちょっとわからないですね。

□林田：

ありがとうございました。

それでは、皆さんから向かって左手に座っていただいている、世代的に言うと少し若くなるお二人にお越しいただいています。

まずは、畑本さんですね。畑本さんの場合には幼少期に逆に日本からブラジルに行かれて、学習言語がバリバリの

ポルトガル語であったとお聞きしていますが、先ほどからお話が出ております 1992 年にご家族で日本に帰って来られています。現在はこの大阪国際交流センターで勤務しておられます。

では畑本さんの方から、まずはこちらの先輩方のお話を聞いて、ご自身の言語観や語感と言いますか、そういうお話を少ししてもらえますでしょうか。

□畑本：

そうですね、自分個人の話になりますが、私は母がブラジル人で父が日本人なんですが、もともと私は日本で生まれたんです。ちょうど日本が経済的にもよくなってる時代に母と父が日本に完全に出稼ぎという形で日本に戻ってきました。母は日本に滞在中もいつかブラジルへ戻るという感覚で父と一緒に暮らしてて、そのうちに私も生まれました。だけど結局日本の経済とブラジルの経済を比べると、実際は日本の方がいいっていう判断を父はしていたのですが、母は若かくて父のそういう思いにこたえてやっぱり実際離婚することになってしまって。ちょうど私が 5 歳になった頃、母はやっぱりブラジル人なんで自分の家族に近いブラジルにいた方がいいという話になって、私と兄をブラジルに連れてったんですね。

で、岡田さんのお話にもありました 92 年のハイパーインフレではいろいろうちは大変だったんです。ちょっと話が戻るんですけど、母が再婚したときに私と合わないところがあって、自分はもう大人だと考えて家から出て、自分一人で人生を歩いていこうと思いました。結局経済的にいろいろ苦労して、大学は中途半端になったんでが、92 年に日本に戻って来ました。日本に戻ったときにはもうこのような顔立ちなのでみんな私を見ると問題にするんです。言葉も日本語で言えるのは、こんにちは、こんばんはとか簡単な挨拶だけ。例えば日本人の場合は「おはよう」を「おはようございます」とも言うんですよね。言葉の後ろに「ございます」ってついてたら、え、これ何て言ってるんだろうか、という状態で日本に戻って来たんです。私は言葉も全く理解できなくて、いわゆる3Kの仕事から日本の生活をスタートして、ここまで来ました。

これぐらいの日本語はしゃべることができるんですけれども、やっぱりきちんと学校で、学習言語としても習ったことないから、これからいろいろ頑張りたいと思っています。

□林田：

畑本さんの場合もこうやって話をしていたら、もう普通の日本人みたいですよね。「読み書き」それから「聞く話す」ということで申しあげると、やっぱり「聞く話す」はもう完璧なわけですよ。

□畑本：

ええ、そうなんです。読み書きとその会話っていうものの間に本当に壁がある。大きい壁がありますね。その大きい壁を崩すっていうのはきちんと学校教育を受けることが必要になると思います。

□林田：

畑本さんね、こうやって日本に戻って来られたときにはもう成人になっていましたから、タイムスリップするわけにもいきませんし、学習言語として日本語の習得はできませんからね。実際に。

□畑本：

そうです。そのとき日本に戻って来たっていっても一人で戻って来たから、自分で稼いで自分で生活しなきゃいけないから、その分やっぱり勉強できなかったところもあるんです。まだまだこれから頑張りたいと思いますね。

□林田：

それでは、今度はバルバラ・ピエトラガラさんです。

バルバラさんは、デボラさんという 1 歳年上の姉がいるんですが、1997 年に、家族とともに 9 歳で来日し猛烈に小学校、中学校、高校とですね、日本語を身に付けられて、先週確か日本語能力検定試験 1 級を受験されましたね。

それこそ見かけは外国人ですけれども、立派に日本語で「読み書き」「聞く話す」もできるブラジル人です。それでは、バルバラさんから畑本さんと同じような話をバリバリの関西弁でお願いします。

□バルバラ：

はじめまして。バルバラです。

そうですね、私は日系 3 世としてブラジルのサンパウロの田舎で生まれ、親は母方のおじとおばが日本から移民で来た人で、お母さんはブラジル国籍ですが日系人です。で、お父さんはアフリカ系とイタリア系であり、私はその全部のミックスいうことです。

9歳までブラジルに住んでまして、ある日突然親が日本に出稼ぎをしに行こうと。ブラジルの景気はそんなに良くなく、それは 1997 年です。仕事は、やっぱり物価がだんだん上がって来ている時期で、経済的にもすごく悪いとまではいってなかったんですけど、日本に行けば仕事がある、お金が簡単にもらえる、という噂を聞いて日本語もわからずに日本に来ました。

そして小学校 4 年生として日本の小学校に入り、全くその時期は学校に外国人がいなかったんですが、学校の制度としても日本語を教えるクラスがなく、日本人ばかりの学級に入り込み何も言葉はわからないまま授業に参加していました。で、2年後ぐらいにはだんだん日本語がわかるようになり、中学校を卒業して日本人のように高校を受験しました。免除があったんですが、免除と言っても時間が 1.3 倍になる程

度だったんですね。で、日本語にふり仮名が書かれているような状況で、工業高校に入学しました。その時期もずっと親は「あと2年でブラジルに帰ろう」といつもそういう目標だったんです。子供としては、「ああ、ブラジルに帰ったら、さらに教育が受けられる」っていうことを思ってたんですけど、毎年毎年同じことの繰り越しで、2年後に帰ろうという話をされてたんですけどいつになっても帰れないじゃないかと、逆に反発をしてしまって、高校のときにブラジルに一度帰りました。家族で、まあ旅行のつもりで帰ったんですけど、その話が出た南谷さんとは少し逆で、ブラジルに帰ったときに私はブラジル人だというアイデンティティを取り戻したんですね。

今まで高校の1年生まではずっと私は日本人と思いこんでたんです。日本人とずっと勉強して来たし、仲間たちも日本人ばかりだったので、自分は日本人になれると思ってたんですけど、ブラジルに帰ったときに、「私、何か違う。ブラジル人なんだ」ということを実感したんですね。ブラジルの適当さ、大ざっぱさとか。私はこちらだったんだということを身にしみて感じて、日本に帰って来てからそのアイデンティティというものを再度考えるようになりました。

で、やっぱり高校の教育を受けるにあたって、このまま高校だけを卒業しても出稼ぎだし日本に来られている方みたいに工場勤めになるんではないかな、という風に感じました。そのことに対して、やっぱりせめて大学の学力をつけて卒業すれば何とかこの世界でいい職につけるんではないかという思いから、大学に進学すると将来を決めて、今は大学3年生で国際文化学を勉強しています。

□林田：

どんなことを勉強されてるんですか。

□バルバラ：

今は異文化環境を専攻しておりまして、すべてを異文化として考えるんですね。年代にしても、性別にしても、職業関係もすべて異文化として見るんですけど、文化だけでなく世代も異文化、何もかもが異文化として考えるような学科ですね。

□林田：

なかなか難しい専攻ですね。ありがとうございました。バルバラさんの場合には、かなり青年期に近い時期になってブラジルに行かれて、自らがブラジル人であることを気づくのですが、やはりその感性的な側面、感情面は彼女にとってはやはりブラジルでありポルトガル語であるということだったんですけども、彼女の場合にはやっぱり日本に来られて、ご両親から「今すぐにもブラジルに帰りたい」と毎回そう言われ続けて今日に至っているわけです。その辺りのことにあまり左右されず、日本語の漢字力をはじめ、日本語を学習言語として身につけられたというのは非常によかった選択だと思います。そして、ある時期にブラジルに帰ったら今度はポルトガル語に目覚めて、そして彼女は自分の言語ルーツをたどろういう取り組みを成人になってから始められてるいうわけです。今、一生懸命彼女はポルトガル語の遅れを取り戻そうとして、日夜ポルトガル語の学習にも励んでおられるということです。

さて、それでは登壇していただいてる方々のお話をいったん終えたところで、岡田さんはご出演の方のうちどなたかにこんなことを聞いてみたいとか、何か質問があったら投げかけていただけますか。

□岡田：

質問というより高橋先生が言われました《移民を受け入れる寛容性の涵養さ》という言葉に注目したのですけれども。

私、駐在してまして、移民された日本人それから日系人の方々がブラジル社会に非常に貢献されてるということが、我々企業で進出している者にとってすごいメリットっていうか、日本人の地位がしっかり確立されているので我々進出企業は非常に商売がやり易かったということです。

それは笠戸丸以来、当時日本で生活するのが本当に苦しかった方々が、ブラジル奥地に入植され、荒れた土地に行き、開墾されたわけですけど映画で観ても、生存されている移民の方のお話を聞いても本当に大変だったようです。しかし一旗挙げるまで、日本に帰ってもしょうがないと歯を食いしばって、自分は小学校しか出なかったけれど、子供には中学、高校、できれば大学教育を受けさせたいと頑張られたと。その結果、今日系人の方は、大学教授とかお医者が多いんです。

それから日本人は嘘をつかない、騙さないということがブラジル社会で確立されていることは、私たちにとって本当に有難いことです。

一方、今ブラジルから日本へ働きに来ている方、いわゆるデカセギの人達は、もうブラジルで生活が出来ないというのではなくて、日本は生活水準が高いし、日本の方がもっといい給料が貰えるからと来られている人が多いのではないかと思います。即ち、昔の笠戸丸以来の移民の人と、それから今日本に来ているデカセギの方とはちょっと違うかな、と。

現在ブラジルからのデカセギの方は 30 万人を超えてますが、高橋先生が提起された《日本人に本当にその移民を受け入れる寛容性が出来るのか》という事については、ブラジルに於けるブラジル人の寛容さと異なり、私は少々疑問視しています。

日本人は小さな島国、しかも有史以来一度も他国から侵略されたことのない国に居住してきた世界でも稀有な民族です。従って、見知らぬ人を見ると、あの人どこの出身かな、どこの生まれだろうとか、何か根掘り葉掘り聞いたりしますね。だから日本人は自分と異質のものをなかなか受け入れられ

ないんじゃないかと思うんですけれど、高橋先生、どう思われますか？

□高橋：

確かに昔移民としてブラジルへ行った場合と、逆に今その子孫が日本に来てる場合の状況は、同じような仕事をさせられているという部分では同じだと思うんですけど、やっぱり日本人というベースで考えた場合十分教育を受けたくても出来なかった一世の人が二世の人の教育に力を入れていた。つまり人間ていうのはやっぱり教育がベースだという基本概念を持っていたということです。だから今ブラジル人で日本に来ている、例えばバルバラさんのお父さんたちも含めてですね、やはりそういう観点に立ってもらえれば、つまりブラジルの中で何で先人の日系人が今いい地位に就いているかというと、高等教育を受けてるんですね。で、それを支援したのはやっぱりその親なので、せっかくこう日本に来ているのに、ただ単に出稼ぎで終わるんではなくて、やはり子供たちにちゃんと教育を受けさせるというふうに親がかかわってほしいなと思いますね。だからブラジル人、日本人でももちろん問題は同じだと思うんですが、やっぱりブラジルから日本に来ているブラジル人にそういうふうになってほしいなと。それがないとですね、100 年後を見据えた視点というのが出てこないんじゃないかというふうに思ってます。

□林田：

バルバラさん、どうですか。

□バルバラ：

私も同感ですね。やっぱり親たちは日本に来るときは同時に目標を持って来るんですね。例えば、「5 年日本にいてお金を稼いでブラジルに帰ろう」という目的で来るんですけれども、子供たちにもそういうことをインプットするんですね。ですから子供も小学校に入っても、「どうせすぐブラジルに帰るし、ブラジルでまた勉強できるから」という気持ちで学校に入るんですね。でも、親がそういうことを言っていなければ子供たちも、「じゃ、今勉強を頑張るんだ」という気持ちになるんじゃないかなと思うんですけど、親はずっと家でも「すぐにブラジルに帰るから勉強なんてしなくてもいいよ」っていうような感じですね。私の親もそうだったんですね。高校に入るとお金がかかるから早く就職しなさい、ということも言われて。でも友達関係てすごく強いじゃないですか、日本では。私は、友達が高校行くから友達と一緒に高校行けなかったら、その縁も切れてしまう、という気持ちだったんですね。で、親に反発して高校、そして大学まで行ってるんですけれども、やっぱり子供たち自身にも気づいてもらいたいですね。親が持った目標に自分がどのような役割を果たしているのか、ただ親の空想によって日本に来てるんではないか、という疑問を子供たちにも持ってもらいたいなと思います。

やっぱり中学校までは義務教育なので、学校にも何となく行く日系ブラジル人の子供は多いですが、高校受験になるとやっぱりハードルもすごく高くなってきますし、日本語力がないと浮き上がれないこともあるんですね。日本ではだんだんと制度的にもポルトガル語で作文を書けたりする場合もあるんですけど、やっぱり子供の時からの教育に対する考え方をもっと紹介できたらいいなと思います。教育を受ければこんだけ未来が広がるんだよという。工場で働くのではなく、日本でブラジルとのかけ橋になれる人間になる、その歩みを作っていきたいなと思います。

□林田：

なかなかかっこいいですね。ただ、バルバラさんは高校から大学へ進学するときに、単に友達が行くからというのはなくて、やはり多分に日本語を学習言語としてずっと積み上げて来ているので、やっぱりそれも大きい要素かとおもうんですが。どうでしょうか。もっと日本語を勉強したい、などあるんじゃないですか。

□バルバラ：

でも一番やっぱり友達ですね。

□林田：

友達ですか。

□バルバラ：

はい。日本語力が付いたことから自分の力を試したいということもあったんですけど、日本人の友達がいることによって自分の生活が成り立っていたって思います。その友達がいなくなったら、私どうなるんだろう、と。ブラジル人の友達は数えるほどしかいなかったんです。5人未満とかですね。中学校卒業して勤める人って少ないじゃないですか。皆さんの世代でも。結局、仕事をしたら先輩と先輩とのつながりばっかりになってしまうことから、私はやっぱり友達の輪を続けて、日本人で、という意識だったんですね、中学校までは。この仲間から外れてしまったら、もう一生入れないっていう感じを持っていたので、まず友達との縁を続かせるためにということを大事に思いました。

□林田：

今さらながら、皆さまにお説教してもとは思いますが、日本の学校で外国人の子供たちが多いとはあんまり実感しないですね、現状は。大阪府下の 880 万人口あるいは大阪市 250 万～260 万人口の中で、圧倒的に戦前からの在日朝鮮人、韓国人の方が 14-15 万というような数字です。それに上乗せする形で大阪府全体で 21 万ぐらいのところです。で、ブラジル人は 4,000-4,500 人ぐらいです。

私は教育機関におりますから、例えば大体 40 人のクラス

で、同一外国籍の子供が二人いることは非常に重要だと思います。それはクラスの 5%にあたります。しかし現状を言うと、バルバラさんもおっしゃったように 80 人でやっと 1 人いるくらいです。100 人でやっと 2 人とかそんな状況、つまり孤立無縁なわけです。だから友達のきずなといったものを大事にするというときにやっぱり日本語が必要です。日本語をどんどん鍛えていくことによって友達との関係も円滑に発展していきますから、非常にそういう面では、バルバラさんが日本語を選択している必然性は、その数の少なさや、経済事情も含めて、それが彼女をこうならしめているということになると思います。

少し戻りますと、先ほど岡田さんの方からもお話がありましたように、過去 100 年間で日系人はブラジルの社会に 140 万ぐらいおります。ブラジルの人口は 1 億 8,000 万ぐらいですから、これは 1%、いや 1%に満たないですかね。ただ、サンパウロ市に関して申し上げますと、1,100 万くらいの人口。東京並みですけれども、サンパウロでは日系人が 55 万人ぐらい、つまり 5%くらいですね。ところがサンパウロ大学だけだとその割合が一気に 15%になります。私の友人のブラジル人家庭で見ますと、5 世、6 世の子供が今大学年齢とか卒業年齢でおります。各学部で首席卒業者が日系でぞろぞろいるわけです。もう皆さん当然のごとくお医者さんや弁護士になられたりする。国家資格でブラジルの激烈な競争社会を生き抜いていこうというわけです。

余談ですけれども、日本においても大阪においても在日朝鮮人、韓国人の方が当然のごとくお医者さんや弁護士になられる。私は 53 歳ですけれども、大体 50 歳台が在日韓国朝鮮人の 2 世に相当しますが、やっぱりみんなお医者や弁護士になろうと高学歴を持っていて、立派に社会で働いておられます。それを支えるコミュニティの数はやはり必要ですよ。その目安として、私は人口に占める割合 5%がコミュニティを形成する最低限の数字であると考えることにしています。

現在外国人が日本で確かに集中してる地域、例えばこのところ話題になった美濃加茂市などは 5 万人の人口で 10%を外国籍住民が占め、ブラジル人が非常に多いですが、早速今回の金融危機が各地で影響し始めたところです。5%を維持できるというのが現在日本でどれぐらいの規模の社会か、ちょっとシミュレーションで計算しましたら、22 万人～23 万人の人口があってやっと 5%。それ以上になるともう 5%に達しないんですね。22 万人というとこの近辺で宝塚市とかですね、言ってみると大都市圏ではないということです。やはり大都市圏、つまり 100 万人規模の都市以上、大阪クラスあるいは東京都なんか 1,500 万人ですけども、それぐらいのクラスのところで社会的な状況が学歴を積み重ねることで社会進出も図れるということがない限りは、やっぱり本当に押しつぶされてしまうんですね。

先ほども言いましたように、多文化共生と言ってもそれは絵に書いた餅のようで、実際上はそれほど共生は上手くいかなくて、どうしても価値観の押しつけになったりしますから、我々が社会のマイノリティであると認めリスペクトをするということは非常に重要ではないかと思っております。そうでなければ「内なる国際化」が進まない。これから現在の経済危機を経て、やはり我々の社会の人口が激減するのは確かで、外国の方を受け入れるということがまた始まると思いますが、その折にはやはり今申し上げたような理解をして、きちんとした形で合法的に労働力の確保を行う。そういうインフラを整えていかないとこれからの日本は世界的にも大変なことかなというふうに思います。

少しちょっとこれは、私の方で脱線をしましたけれども、そうしましたらどうでしょうか。南谷さんから、他の方に何か質問はありませんか。

□南谷：

感想なんですけどバルバラさんのお話で、私がちょうど対照的だったので、やっぱり自己のアイデンティティというのはその幼少期に形成されるものなのかなということが、印象としては残りましたね。はい。

□林田：

結局、言語の形成としては、勉強が難しくなってくる大体 10 歳か 11 歳ごろからです。11 歳ごろから「社会科」の勉強っていうものが始まりますので、どうしてもそれ以前の年齢と言うと感情の表現「うれしい」とか「怖い」とかそういうものが中心になりますから、その部分の形成がその時期に果たされることは自然だったろうと思います。

さて、それではですね。今からはフロアの皆さんの方からそれぞれのスピーカーかあるいは個人の結びになるような質問や意見の交換等を少ししてみたいと思っておりますので、挙手をいただいてご発言いただくということをしたいと思います。どんなことでも結構ですので、ちょっと聞いてみたいということがありましたら、是非この機会を利用してご発言いただきたいと思います。いかがでしょうか。

お名前とご所属等をお願いいたします。

□Y 氏：

名前ですけど、Yと言います。

私も日系3世で、非常に興味深く聞かせていただきました。パウロさん（高橋さん）がおっしゃったように私も家庭の中で教育にすごく重点を置かれまして、10 歳で日本に来たんですけど、大学を出まして今は京都外国語大学大学院博士課程に通っていますが、教育に力を入れるというのはすごく大事なことだと思うんです。少しお話を聞いていて私が疑問に思ったのが、ブラジルでは日系移民は教育に力を入れて医学部などを卒業して、今はすごい上級層でブラジルの国を

支えています。そういう移民、日系が多いのです。それを今度私たち日系ブラジル人が日本でしようと思えば、やっぱり日本は社会全体がブラジルよりもずっと、何て言ったらいいんでしょうか、基盤が厚いですよね。その中でチャンスっていうものがやっぱり私たち日系人にはちょっと限られてるんじゃないかなって思うんですね。また教育には経済的にすごくお金がかかりますね。ブラジルでは大学は国立大学とかは無料で行けてお金はあんまりかからないんですが、日本では非常に苦しいんですね。出稼ぎとして両親がブラジルから日本に来て働いている中ではなかなかみんなが払えるものではないものだと思うんです。そういった経済的な問題点もあると思うんですが、日本社会の中では出稼ぎの子供、子孫たちが生きて行く中で、チャンスが限られているというところにちょっと国の違いがあると思います。そういった観点からお話を聞かせていただければと思いました。

□林田：

Yさん、どなたに御質問ですか。どなたにお話が。

□Y氏：

そうですね。林田先生か、パウロさん（高橋さん）にお願いします。

□林田：

では、高橋先生からどうぞ。

□高橋：

実はYさんは知り合いなんです。

私はブラジルに生まれて日本に帰ってきたわけですが、ほとんど日本で暮らしている日本人なんです。

ちょっと紹介の中に入ってますが、いわゆる 1908 年にブラジルに笠戸丸が出港して 100 年目を記念して、4 月 27 日に、本当は笠戸丸出港の日は 4 月 28 日だったんですが、神戸のメリケンパークで 100 周年のイベントを開催し盛り上がったんです。その主催が神戸のNPO法人の関西ブラジル人コミュニティーというところで、それに私はちょっと関与しています。

さて、ただ今の質問ですが、確かに日本の中で勉強していくっていうのはバルバラさんを含めて非常に厳しい状況にあると思います。私の場合は昭和 29 年ですから今の状況と全然違いましてね、田舎ですし情報もなかったんですけど、いい先生に恵まれまして、先生といろいろ話をする中で、こうした方がいいよとか、ある意味では私の進路を決めてくれたような先生に出会ってるということですね。ですから日本の教員の中にも問題があると思うんですね。日本の先生方の中に、文化の異なる生徒を受け入れる先生がいると、その先生に対して自分が入り込めていろんなことが相談できるという部分が出てくると思うんです。周りの友達も自分に対して何も目を向けてくれないし、学校の先生も目を向けてくれないと、やっぱりその雰囲気の中で勉強する意欲は出てこないですね。

だから先ほど岡田さんが言われたように、日本人が変わってほしいという部分もあるんですけれども、特に教育の中ではどうも先生方の見る目が今増えている日系人の中にまだ向いていないなと感じます。だから、ブラジル人の子供たちが学校に行っても余り勉強する雰囲気になってないように思いますね。

日本の中では難しい、全部ハードルが高いって言うんですけども、そういう先生に出会えるような状況、教育的な文化が日本の中にこれから増えてくれば、おそらく日本のブラジル人の中でもそのハードルを越える人が出てくると思います。これは外国人に限らず、日本の子供たちもそうだと思うんです。日本の教育の問題に通じるところがあって、やはりいろいろな広い視野を持った教育者が教育の中で増えてくれば、日本、ブラジルに限らずそういった問題点が解決されてくるだろうと思います。

しかしながら、現状ではそんな簡単には行かないだろうと。非常に時間がかかるけども、でもやはり私はブラジルから日本に来ている親とその子供たちの意識も変わることが大事じゃないかなと。子供たちが問題を起こしても学校の先生に相談できるぐらい両親が援助して行かないとちょっと難しい状況にあるのかなと思っています。

□林田：

ありがとうございました。

Yさんの方から私も指名されましたので。バルバラさんもですが Y さんも、少しかわいそうな面があると思います。つまり社会的な位置づけが少し中途半端なんですね。日本人でもなく、外国人でもない。そういうときはいわゆる一般的には留学生ということになります。本学でも留学生を今後もっと増やそうという話があるんですけれども、いわゆる留学生として来る外国人には非常に扱いが丁寧ですよね。奨学金もたくさんあって。とにかく大学院まで行かせよう、そして日本を好きになってもらって、日本で就職してもらおうっていうシナリオあるんです。しかし、お二人の場合はそういう意味で非常にその存在が曖昧ですね。そのどちらでもないんですね。やはり就職においても、雇用者側にその辺りの協力や配慮が僕は必要かなと思いますし、今後は、そんなこと言ってられませんから、やっぱり能力があれば雇用するという方向も当然出てくるはずですからね。それに期待したいです。そうでなければ、移民と言いますか、他国の人を受け入れるということはもうできない、と思います。

ありがとうございました。

他にどなたかありませんか。せっかくの機会ですから。100 年に1度の機会ですので。

○X氏：

すいません。所属は三重の名張の北中学校というところで教員をやっております。ブラジルの生徒とかかわりを持ってる外国籍の生徒を支援する部局を担当しています。

2名いまして、今1名は帰国しており、帰国したまま連絡がなく日本に帰って来ません。そういう状況の中で今年の 8 月に実はJICAの教師海外研修プログラムでブラジルのサンパウロの方に行かせていただきました。そのプログラムの中で日系人社会の歴史や日本移民資料館の見学、また日系農家シライ植民地というところまで行ってそこで日系農家の方のお話を聞いたり、少しブラジルの勉強をさせていただきました。

たくさん質問はあるんですが簡潔に2点お願いします。

バルバラさんですけども、先ほど 9 歳で来日をして堺の方の小学校、中学校と上がって来た中で、自分のアイデンティティというのは、日本人なのかそれともブラジル人という誇りを持ってるのか、をお聞きしたいです。私はいつもブラジルの子供たちはどっちなのかなと気になってるんですけども、ブラジルの子としても生きてほしいし、日本人のよさというのもやっぱりつかんでほしいというので、バルバラさんご自身の中でのアイデンティティっていうのをどうお考えか聞かせていただきたいのが1点目です。

もう1点はですね、どなたという方は指定はないんですけれども、サンパウロに行ったときに日系人社会についていろいろと考えたんです。日系人社会がこれまで 100 年築いて来た歴史っていうのは非常にすばらしかったとすごく感じました。ただ、ではこれから 100 年後を見たときに日系人社会というのはどうなって行くんだろう。例えば今もう日系 3 世、4 世の人たちの日系人同士の結婚というのが減って来て、現地の中ではやっぱり非日系人間での結婚が増えて来ている。そうすると日系コミュニティというのも 2 世のころに比べると弱くなって来たというお話もいろいろ聞かせていただきましたので、どなたでも構いません、これから 100 年後を見据えたときに、日系人社会というのはなくなっていくのか、それともどうなって行くんだろう、というあたりをお聞かせ願いたいと思います。

□バルバラ：

アイデンティティからなんですけれども、私は高校生の 16 歳までは、頑張れば日本人になれると思ってました。日本語も流暢に話せるようになりましたし、中身も既に日本人になっていて自分のことを日本人だと思ってました。でも、ブラジルに帰ってから、やっぱりブラジルっていうアイデンティティが自分に含まれているっていうことを感じるようになりました。今では自分のアイデンティティはブラジル人かなと思ってるんですけれども、やっぱり日本の社会で教育も受けて来ていますので、40%ぐらいは日本人じゃないかなって思ってます。

やっぱりブラジル人はすごく率直なんですね。でも日本人はちょっと控え目なところがありますよね。私はブラジル人のように率直過ぎるところもあったり、日本人のように遠慮する場面もあるんですね。だから、本当にこんな言い方は悪いんですけど、ブラジルと日本のいいところだけを取って、でもちょっとブラジルっていうアイデンティティの方が強いんじゃないかなって思います。

日系人社会についてですけど、私の考えではなくなることはないんじゃないかなと思います。ブラジルで日系人社会に私も入ってたんですけれども、日系じゃないと使えないプールであったり会館であったり、そういうのがたくさんあるんですね。ご先祖が日本人であればそれを使うことができるんですよ。設備も普通のブラジルの設備よりすごく整っていて、そこで日系人のコミュニティがあってコミュニケーションを取る場にもなりますし。日系人社会はなくなることはないですけど、消えつつコミュニティが広がって行くのではないかなと思います。他の皆さんはどう思われますか。

□岡田：

先日NHKテレビでアメリカの日系人という番組を見ました。

アメリカでは、中国人、韓国人それからベトナム人がどんどん増えて来て、現在では、日系人が4番目になったらしいです。これと同じことがサンパウロで起こってます。サンパウロのリベルダーデ地区は昔は日本人街と呼ばれていましたけれど、今は東洋街と名前が変わりまして、土産物屋とか日本食料品店の看板は日本語で書かれていますが、オーナーは、韓国人だったり中国人だったりします。どんどん日本人、日系人が少なくなって来ていることから考えると、アメリカにおける日系人が今ではアジア系アメリカ人と呼ばれているように、将来、ブラジルでも日系人がアジア系ブラジル人と呼ばれるようになっていくのかなと。

顔も似たような顔ですしね。

どうして中国人や韓国人が多くなったかと言うと、台湾の人は、中国により併合されるリスクをヘッジするため、それから韓国も南北問題があるので、財産を持ってきて永住するために来ているのです。その意味で、笠戸丸の日本人より最初から経済基盤がある人たちが来ているので成功する確立が大きいのです。

高橋先生はどうお考えですか？

□高橋：

そうですね。今年 100 周年の記念パレードがサンパウロ市内であったんですけど、その中に 3 世、4 世、5 世の非日系の人たちの参加が多いですね。つまり日系社会の中に先ほど言いましたようにだんだん混血が日本人との混血も増えてきましたよね。もう日本の文化そのものを理解する非日系人も今増えてますので、そういう形で日系社会は残っていく

だろうと。だから日本の文化そのものはいろんな形で残っていきますので、日系社会の中で完全にもう日本的なものがなくなって行くような状況にはならないだろうと思います。で、それをちゃんと伝えるシステムは大家族制なんですが結構まだブラジルでは残ってるんですね。日曜日になると親のところにみんな集まって食事をして帰っていくという雰囲気はまだ残ってますね。特にブラジルに移民しているのは沖縄出身者が多く、沖縄のコミュニティの結束力は非常に強いので、沖縄の文化は沖縄に残るよりもブラジルに残っていると言われてるぐらいです。恐らく将来的には日本の文化もブラジルに残っているっていうことになるかもしれませんね。また、日本文化を非日系人が理解している。すしも食べますし、踊りもするし、カラオケもするし、これが日本の文化かって言えば失礼なんですけど、茶道とか俳句も含めて高文化的な部分も同時にそれを出版しているぐらいのレベルで残ってますので、そう簡単にはなくならないだろうと思ってます。私が生きている限りとは思いますけど。

□林田：

いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、まだ時間がありそうですので、どうぞ。

□Ｔ氏：

僕は神戸にあります財団法人日伯協会のTと申しますけども、今年 100 周年ということでブラジル行ってまいりました。

ちょうど 13 年前の阪神大震災後にブラジル人と日系人の方が神戸にお越しになったことがありまして、神戸NHK放送局の北西 200mのところにある 100 年前の国立移民収容所、今の神戸移住センターという建物をご覧になりました。現在改修工事中ですが、改修のきっかけは阪神大震災の後で倒壊した神戸の街においても神戸移住センターが厳然と建っている姿を見て、「100 年間頑張って来たブラジル日系人の方々があるのと同じように、日系人の出発地である神戸移住センターを残してほしい」という要望があったからです。もともとは国立移民収容所でしたけれども、その後神戸市に移管され、現在は兵庫県、神戸市と財団法人神戸日伯協会が連携を取りながら、改修作業をしています。来年の 9 月にできあがる予定ですが、日系人の方々が苦労をもろともせず頑張りぬいたその歴史を残そうとしているんです。

現在ブラジルでは日本人が必死に頑張ってきた姿によってブラジルに大きな足跡を残しています。しかし、その日系人の方々がだんだんと血は薄くなっています。例えば、先ほどおっしゃった日本人街は東洋人街と名を変えるぐらい一部の経営者を除いては、日系から中国系、韓国系に移っていますが、やはりその私どもとしては海外日系人会館を残すということで、活動しております。

日本から 100 年前に船で出発した方々を祖先として日系の方は現地で定着しておられますので、逆にこれからは先ほどのYさんが言っておられた日本に来られたブラジルの方々をどう日本が援助するかというのも含めて、そういう運動を政府なりあるいは各自治体がきちっとフォローすると同時に、また日本人がせめて地域社会で連携を取りながら、私どもは貿易も含めた神戸を拠点としてですが、日系人社会を、特に日系ブラジル人の方を守っていかなければと私自身強く思っております。

○林田：

貴重な御意見ありがとうございました。

それでは前のもう一方、ご質問があったと思いますけど、どうぞ。よろしいですか。

○Ｚ氏：

私は現在大阪に住んでおりますが昭和 9 年から両親、弟妹とともにブラジルに移民として行きました。3 年間農業をやっていってその後サンパウロに出て来ました。昭和 28 年 4 月に日本に帰って来ました。

ブラジルにおける日本人社会を高く評価してるのはブラジル政府とブラジル社会ですね。日本政府は特に外務省を始めとして国に捨てられたと考える移民の間で軽蔑されているんですね。それとあまりブラジルにおける日本人社会のことを知らないと思います。

例えば第二次大戦の時は、ブラジルでは野菜があんまりなかったんですが、日系人がサンパウロ郊外の植民地に野菜を作って新鮮な野菜を売る研究をしたんです。後にこれを感謝して時の大統領が閣僚と共に現地に来て私たち両親も含めた日系人に、新鮮な野菜を食べれるようになったのはあなた方のおかげですって礼を言われたんです。もしこれが逆だったら日本政府はそんなことするでしょうか、と思うとブラジルの心の広さを感じました。

ブラジルの最近の新聞で見ましたけど日系 3 世で陸軍中将になった人が奥地の方へ行ったり、警察所長や市長などあらゆるところで日系が活躍しております。そういうことが日本では全然知られてないんですね。

コーヒー園でも道路を挟んで右側がブラジル人の農園、左側が日本人の農園とすると、日本人のコーヒー園には草一つ生えてません。ブラジル人のコーヒー園はもう草ぼうぼうなんですね。このようなことでブラジル社会では日本人は高く評価されているんですが、日本では全然そういうことを評価してません。

第二次大戦で外国人ということで日本人は痛めつけられて、私の父もスパイの嫌疑で 11 日間独房に入れられたんです。それまで警察というと市の警察だけだと思ってたんですが特高課のようなのがありましてね。私は、特高課に受付も何も通さずどんどん上がって行って、直接、父は何もしていないし病気なので早く出してほしいと 3 回ほど訴えました。これも日本では絶対に入ってはいけないですし、勝手に入

っていったら受付でも断られるかほうり出されるでしょう。その点ブラジル人はやっぱり心が広いのかなと思いました。それで、11 日目に特高課から呼びに来て行きますと、隣の部屋から父が出て来ました。もうどんなにやつれてるかと思ったら、全然元気な顔で出て来たんですよね。特高の部長が何もかも全部わかったからこれで帰ってくれと帰してくれました。父によると毎日ビフテキ食べさせてくれてコーヒーも飲ましてくれたと言うんです。母はもう毎晩泣いてばっかりしてたんですけど。しかし、太平洋戦争開始の翌年の 1 月中頃からはだんだん日本人がどんどんスパイの嫌疑で、街を歩いてても日本語しゃべったら皆引っ張って行かれるようになりました。

この間もサンパウロとサントスとリオにいる妹たちからの電話ではもう今は日本人社会でちゃんと日本語を使う者がいないと言っていました。2 世、3 世は親がいると日本語を使うんですが、もう親がいなくなったら皆もうポルトガル語を使うみたいです。何かそれを聞いて寂しい思いがしました。サンパウロには「浪花会」という会があって私の父がそこの役員しておりましたが、その後私はブラジルに行っておりませんので、どうなったのかわかりません。苦労ばっかりしたもんですから、もう行く気にもなれませんでしたけど、今はもっと日本人にブラジルでの日系移民社会や歴史というものを知ってほしいと思います。特に外務省を筆頭にと思うんですが。ありがとうございました。

○林田：

ありがとうございました。

それではちょっと時間が切迫して来ましたが、せっかくお手を挙げていただきましたので、最後にどうぞ。お願いいたします。

○H氏：

和歌山市の方から来ました、Hです。よろしくお願いします。高橋さんに2点ばかりお伺いしたいんですけども。

先ほどから日系人と言う言葉がちょいちょい出て来ますが、私自身「日系人」という言葉の概念、定義というのが、例えば日本語を話せるから日系人なのか、日本人の血が入ってるから日系人なのか、その辺の区別が分かりにくいので、非常に難しいことだとは思うんですがお聞きしたい。

もう一つはブラジル各地にいろんな移住地がありますが、いろいろな本で見ると、同じ場所であっても植民地と呼ばれている場合もあり、移住地と呼ばれている場合もあります。一説には、例えば戦前であれば植民地、戦後に開発されたところは移住地、と分けているような本もあるんですが、植民地と移住地との違いというのが、いろいろ本を読んだり話を聞いたりするときにややこしくなっておりますのでその辺をお聞きできればと思います。よろしくお願いします。

○高橋：

かなり難しい質問ですが、私の考えなんですけど、日系人というのは要するにルーツの中にどこかに日本人が入ってるという意味です。だから日本語がしゃべれるかしゃべれないかという問題ではなくて、どこかにルーツが入ってるという意味だけです。だからそれが今先ほどの質問にあるように、どんどん薄まっていくという前提になっています。で、私の場合も日系のブラジル人。事実私今ダブル国籍になってまして、日系のブラジル人でもあります。だからブラジル人でもあり、国籍的には日本人でもある。でも自分としては日系のブラジル人であるような意識になっていますね。

植民地については、戦前なぜその植民地と言ったかと言いますと、やっぱり国策、で行かされているという意味で、つまりブラジルの中に入り込んでいくという意味の、つまり植民地化するという意味だと思います。政府から見れば植民的な移民という意味で名前をつけたんではないかというふうに考えています。

移住地については特に「移民」と「移住」に私はこだわっています。私自身はやっぱり「移民の子」として今自分があるんだと思っています。移民 100 周年というのは移住 100 周年とは意味が違うと思います。移住というのは自分の意志で行ってるという意味で、移民というのは国策で他国へ自国の「民を移す」という意味があるので、植民地への移民はやっぱり戦前の考えだと。で、移住地というのは戦後の自ら行くという意味で使っているのじゃないかと思いますが、その辺の整理が非常に難しいとは私も感じてます。お互いに迷うところはそこだと思います。

○林田：

ありがとうございました。大変残念ですがもうそろそろ時間が迫っております。

皆さんにお聞きいただきました内容について、今日ご登壇いただいた出演者の方々の言語理念をまとめて示してみたいと思います。

本日聞きますと、バルバラさんの日本語は学習と申しましたけれども、かなり獲得に近い、つまり母語的な感覚に近い学習であるように思います。

岡田さんは 20 歳を過ぎてからポルトガル語を学習されたんですけれども、もう 20 年ですね。今から 20～30 年前になりますか。どうしてそういうことを申し上げるかというと、実は成人、18～22 歳に、例えば外国語学習を四六時中やるというような授業とか、例えば母語が日本語であるにもかかわらず、高齢でそろそろ「ろれつ」が回らなくなっているにもかかわらず外国語の方が記憶から離れないという症例が実は複数あるんですよ。それは非常におもしろい例で必ずしもいわゆる第1使用言語である母語が最後まで残るかって言ったら実はそうでもない。脳の働きが活性化される 18～22 歳のころまでに吸収された記憶って言いますか。その方が後

まで残るということですね。

僕自身は、言語を身に付けるということはその人にとってLanguage for your happiness つまりあなたの人生に幸せをもたらす言語、あるいはLanguage for your lifeです。つまりそのLife styleを構築するための言語は一体何なのかという視点を導入したいと思っているんです。

あまり、いわゆるアイデンティティにこだわったり、あるいは母語、母語文化とかって言うと、今の我々の厳しい状況の中で、皆さんもホームページ等でいろんなブログを御覧になったことがあるかもしれませんが、今回の金融危機において卑劣なブログがあります。それは極端なナショナリズムです。ちょっとこの場で直接紹介することは憚られますが、「もうブラジル人はいてもらいたくない」「もう出て行け」という勢いでそういうことを平気で書いてる。極端にナショナリズムにつながってしまうこともあります。一方では、「日本人はちょっとだらしないから、ブラジル人よ、団結して頑張って革命でも起こしてくれ」という意見も、実はブログで出ているんですけれども。

言語・文化は確かに自分のアイデンティティを確認するものとしては非常に重要なものではありますけれども、あまりアイデンティティ、アイデンティティと言わない方が、人生にとってはいいかもしれません。我々は40年ぐらい社会にかかわって国で生活していくわけですけれども、重要なのは第1使用言語で、それを自分が選ぶわけです。それを何かと位置づけをする視点というものも重要な考え方ではないかと思っております。

ここでまとめをしましたけれども、本当にこれからしばらくは続く非常にぎくしゃくした状況の中で本当に日本が移民社会になれるのか、あるいはこうした「内なる国際化」、つまり異質なものを多様性としてとらえることができるのか、まさしく試金石になると思いますので、是非皆様も本日聞いていただいた、さまざまな5人の方々の経験と英知といったものを確認していただいて、これからの日本の21世紀をより良いものにしたいと思います。素晴らしい日本の未来がこれから開けますことを最後に祈念いたしまして、本日のトークスペシャルイベントの終了といたしたいと思います。

2時間という長い時間にわたってご清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会：

ありがとうございました。閉会にあたりまして、大阪・サンパウロ姉妹都市協会事務局長 藤田より一言ごあいさつ申し上げます。

○藤田：

私は大阪・サンパウロ姉妹都市協会の事務局長の藤田と申します。

本日はこの日本ブラジル交流年記念トークイベントに本当に多数ご参加いただきましてありがとうございます。また、コーディネーター並びにパネリストの先生方、本当に有意義な議論をありがとうございます。

「内なる国際化」、移民の寛容性、アイデンティティ、そして言葉や文化の問題、本当に有意義な議論が出されたのではないかと思います。ありがとうございました。

それと、今年は日本ブラジル交流年、また移民100周年ですけれども、同時に来年は大阪・サンパウロ姉妹都市提携40周年になります。そこで今年はプレイベントという意味で今回のイベントを開催させていただきました。大阪・サンパウロ姉妹都市協会としましては、今回のこの講演会のようなものやサンパウロから来られた方との交流イベントなどもやっておりますので、ここにいらっしゃる方で大阪・サンパウロ姉妹都市協会に関心をお持ちの方がおられましたら、ご入会いただければと思います。

皆さんのお手元の資料には姉妹都市協会の入会案内書等も入れておりますので、ぜひお目を通していただきますよう、よろしくお願いします。

それでは本当に長い時間、有意義な議論を最後までありがとうございました。先生方もありがとうございました。(拍手)

○司会：

ありがとうございました。

それではこれを持ちまして日本ブラジル交流年、大阪・サンパウロ姉妹都市提携40周年を記念するイベントを終わらせていただきます。入り口を出られますときにできましたらアンケートの御回答をよろしくお願いいたします。また、入口3階のところにブラジル移民の歴史の写真パネルの展示をしております。ぜひ一度御覧いただければと思います。

先生方どうもありがとうございました。(拍手)

■参加者のご感想（アンケートから）■

- 幼少期をブラジルで過ごし日本で教育を受けておられる方、その反対の方、お仕事でブラジルに行かれた方...いろいろな方のご経験や日本やブラジル間の国際交流についてお話を聞かせていただき、大変よい勉強になりました。
- 1年ほど前からブラジルという国に興味を持ち、本や映画等を見るようになりました。ブラジルという国のことを「生の声」で近い位置で聞かせていただき、大変勉強になりました。
- 神戸市もリオデジャネイロ市と姉妹都市交流をしています。大阪市もサンパウロ市との姉妹都市提携40周年の歴史を活かし、骨太のネットワークを広げて欲しい。